

三枚続

泉鏡花

青空文庫

表紙の画えの撫なで子しこに取添きよえたる清書がき
 草紙てな、まだ手習らい児この作つたなりとて拙たき
 をすてたまわずこのぬしとある処ところに、
 御名おんなを記しさせたまえとこそ。

明治三十五年壬寅正月 鏡花

「どうも相済みません、昨日きのうもおいで下さいましたそうで毎度恐
入ります。」

一

と慇懃いんぎんにいいながら、ばりかんを持って椅子なる客うしろの後へ廻
つたのは、日本橋人形町通どおりの、茂った葉柳はやなぎの下に、おかめ煎せんべ
餅いと見事な看板を出した小さな角店を曲つて、突つきあたりの煉瓦れんが
の私立学校と背合せせなかになつてゐる紋床もんどこの親方、名を紋三郎とい

つて大の怠惰者なまけもの、若い女房かみさんがあり、嬰兒あかんぼも出来たし、母おふく親ろもあるのに、東西南北、その日その日、風の吹く方にぶらぶらと遊びに出て、思い出すまでは家に帰らずうち、大切な客を断るのに母親おふくろは愚痴になり、女房は泣声になる始末。

またかい、と苦にが笑わらいをして、客の方がかえって気の毒になる位、別段腹も立てなければ愛想も尽かさず、ただ前町の呉服屋の若旦那が、婚礼というので、いでやかねての男おとこ振ぶり、玉も洗つてますます麗あでかに、雫しずくの垂る処で一番綿帽子と向合おうという註文で、三日前からの申込を心得ておきながら、その間際に人の悪い紋床、畜生め、か何かで新道しんみちへ引外ひっぱずしたために、とうとう髭ひげだらけで杯をしたとあつて、恋の敵かたきのように今も憤っているそ

ればかり。町内の若い者、かしらぶん頭分、げいしやや芸妓家待合、料理屋の亭主連、伊勢屋の隠居がほうねんあたま法然頭に至るまで、この床の持分となるとわき傍へは行ゆかない。目下文明の世の中にも、特にその姿見において、その香水において、椅子において、ばりかんにおいて、最も文明の代表者たる床屋の中に、この床みせツ附つきばかりはその汚さといつたらないから、振ふりの客は一人も入らぬのであるが、昨日きのうは一日仕事をしたから、御覧なさいこの界かいわい隈かみにちよつと気の利いた野郎達は残のこらず綺麗きれいになりましたぜ、お庇かげさま様を持ちまして、女の子は撫なでぎり切ぎりだと、呵からから々と笑う大氣焰だいきえん。

もつとも小僧の時から庄司が店で叩込んで、腕は利く、手は早し、それで仕事は丁寧なり、殊かみそりに剃刀は稀代の名人、撫でるよ

うにそつと当つてしかも布きぬを裂くような刃鳴はなりがする、と誉め称えたえて、いずれも紋床々々と我わが儘ままを承知ひいきで最ひいき貞きにする親方あだな、渾名あだなをいなり稲荷いなりというが、これは化かすという意味ではない、油揚あぶらあげにも関もより係けいしない、芸妓おなじが拜むというでもないが、つい近所の明治座もより最寄もよりに、同一名おなじの紋三郎おなじというお稲荷様があるからである。

「お前まいどこかでまた酒かい。」と客は笑いながら、

「珍めづしくはないがよく怠惰なまけるなあ。」

「何、今度いまばかりや仲間の寄よりでさ、少々その苦情事くるげなんでして、」
 「喧嘩けんかか。」

「いいえ、組合くみあひの外ほかに新床しんじょうが出来たんで、どうのこうのつて、何でも可いいじゃあがませんか、お客様は御勝手ご勝手な処ところへいらつしやる

んだ。一軒殖^ふえりやそいつが食って行くだけ、皆^{みんな}が一杯ずつお飯^{まんま}の食分が減るように周章^{あわ}てやあがって、時々なんです、いさくさは絶えやせん。」

「それじゃあ口でも利かさされたのかね。」

「ならば大名の方なんでさ。」

「それに何も二日かかることはないじゃないか。」

「すっかり御存じだ。」と莞爾^{にっこり}する。

「だっておい四度素^{たびすがえり}帰をしたぜ、串^{じょうだん}戯^{じや}あない。ほんと

うに中洲^{なかず}からお運び遊ばすんじゃないやあ、間に橋^{ひとつ}一個、お大抵ではご

ざいませんよ。」

「おや、母親^{おふくろ}がいった通り。」

「貴客あなた、全くそう申すんでございますよ。」と長火鉢の端が見えて、母親おふくろの声ができる。

二

「ははははは、旨うまくやりましたね、（ほんとうに中洲からお運び遊ばすんじやあ間に橋一個、お大抵ではございませぬ。）ツさ、え、旦那、先刻さつき親方が帰りました時に内のお婆さんがその通りいきました。ねえ、親方、どうですお婆さん、寸分違わねえ、同おんな一じこツたい、こいつあ面白えや。」と少しかすれた声、顔をしかめながら嬉しそうに笑ったのは、愛吉といて、頬に角のある、

鼻の隆たかい、目の鋭い、眉の迫つた、額の狭い、色の浅黒い、さながら悪党の面だけれども、口許くちもとばかりはその仇気あどけなさ、乳首を含ましたら今でもすやすやと寐ねそうに見えて、これがために不思議に愛々しい、年の頃二十三こづくり四の小造で瘡やせぎすなのが、中形の浴衣の汗になつた、垢染あかじみた、左の腕あたりに大きな焼穴のあるのを一枚引掛ひっかけて、三尺の帯を尻下りに結び、前のめりの下駄の板のようになつたのに拇指おやゆびで蝮まむしを拵こしらへたが、三下という風なり。実は渡り者の下職したじよくにん人、左の手を懐に、右を頤おとがいにあてて傾きながら、ばりかんを使う紋床の手をその鋭い眼で睨にらむようにして見ているのであつた。

客は向うへ足を伸のばして、

「そうだろう、人情は誰も同一おんなじだから言うことも違わないんだよ。」

「じゃあ何だ、内の母親おふくろもやっぱり同一おんなじようなことを言つてましよう、ふふん、」と頤を支えたまま、頷うなずくがごとくに言つて笑えみを洩もらす。

紋床は顔を斜ななめに、ばりかんに頬をつけて、ちよいと撓ためて、

「馬鹿をいいねえ、お前めえと同一おんなじにされて耐たまるもんか、人情は異かわらないでも遣やり方が違つてらあな、おい、こう見えても母親にやまだ米の値を知らせねえんだが、どうだ。」

「あれ、あんなことをいうよ、のうお槓まき。」と母親は傍かたわらなる女房に言葉を渡したらしい。

「ほほほほ。」と、気の無さそうに若い女が笑った、と思うと
 嬰あかんぼ児がおぎやあと泣く。

紋床はばりかんの齒を透すかして、フツと吹き、

「おつとまず黙つてあとを聞くことさ。さよう米の値は知らせね
 えが、そのかわりしめだかメ高で言訳をさせますか。」

「違えねえね。」

「黙れ！ 手前てまえが何だ、まあお聞きなさいまし、先生。」

客はこの近ちかまわり辺の場所には余り似合わぬ学生風、何でも中洲

に住んでるとより外くわ悉しくは知らないが、久しい間の花主とくいで紋床

はただ背後うしろの私立学校で一科目預あづかっている人物と心得て、先生、

先生と謂いうが、さにあらず、府下銀座通どおりなる某新聞なにがしの記者で、遠

山金之助というのである。

「どうぞごさいます、この私わつしに意見いけんをしてくれろツて、涙を流して頼みましたぜ、この愛的おふくろの母親おふくろが、およそ江戸市中広しといえども、私が口から小可こつばずかし愧かしくもなく意見いけんが出来ようというなあ、その役介やっかいもの者ものばかりでさ、昔だと賭場とばの上へ裸でひツくり返ろうという奴やつこなんで、」

「何を、詰づらねえ、」

「いいえ賭博ばくちは遣ばりません、賭博ばくちは感心かんしんに遣ばりませんが、それも何幾いくら干かんかありやきつとはじめるんでさ。それに女おんなにかからずね、もつともまあ、かかり合あをつけようたツて、先様さきさまが取合あわねえんですからその方も心配しんぱいはありませんが、飲のむんです。この年とし紀きで

何と三升酒を被りかぶますぜ、可おツそろ恐しい。そうしちやあ管を巻いて
 往来でひツくり返りまさ、病やまいだね。愛、手前その病気だけは治さ
 ないと不可いけねえぜと、私わつしあこれでも偶たまにやあ親身になつていうんで
 す、すると何と、殺されても恨まないから五ごんつく合買つとくんなさ
 い、とこうでしょう、言い種いぐさが癩しやくに障るじやありませんか。」

三

愛吉は何にもいわず、腕こまぬを拱こまぬいて目を外そらして、苦言一針するぐ
 とに、内々恐縮うなじの頸すくを窘すくめる。

紋床は構たなわらず、棚たな下おろし、

「活きるか死ぬかというこれが情婦だつたつて、それじや愛想を
 尽つかしましよ、おまけにこれが行く先は、どこだつて目上の親方
 ばかりでさ、大てえげえ概しんびよう神しんびよう妙しんびようにしていたつて、得て難癖が附こ
 うてえ処でその身持じやあ、三日と置く氣遣きづかいはありやしません。
 もつとも三日なんて置こうものなら、はじめの日は朝寝をして、
 次の夜よは内をあけて、三晩目には持もちにげ遁ねむをしようというもんだ。」
 「まさか、」といつて客の金之助は仰向あおむけに目を瞑ねむる。
 愛は小指のさきで耳みみたぶ朶みみたぶをちよいと搔かいて、
 「酷ひどいなあ、親方。」
 「まあそういつた形よ、人情は同一おんなじだから、」
 「何が人情、」

「そうじゃないか、だつてお前めえまね真似をするにも好いいことはしたが
 らねえだろう、この間もね、先生、お聞きなさいまし。そういう
 風だから山のて手も下町も、千住せんじゆの床屋でまで追出されやあがつて、
 王子へ行ゆきますとね、一体さきさき渡わたりがついてるだけにこちとら
 の稼業はつきあいいが難かしゆうがす、それだのにしばらく仕事を
 さしてもらおうというその初対面とこの許しゆくで、宿の中ほどの硝子戸がらすどを
 あけると、突いきなり然わつし、私あ忙しい身体からだでござえて……とこうさ。
 どうです言種いぐさは、前かど博徒ぼくちうちの人殺ひところし兇状きようじようもち持ちの
 挨あいさつ拶つというもんです。それでなくツてさいこの風体なんですも
 の、懐手でぬツと入りや、真昼中まっぴるなかでもねえ先生、氣の弱い田舎
 なんざ、一人勝手から拔出して総鎮守の角の交番へ届けに行こう

というんでしよう。

この頃は閑ひまだからと、早速やっこがりを食つて奴やつこさん行ゆきどころ 処ところなし、飲んだ揚句やうこなり、その晩はどうとうお宮の縁の下に寝ましたツさ。この真似もまた宜しくねえてね。

仕方がねえんで舞戻まつて例のごとく親方済みません、が呆あれたもんです。そうして私わつしが忙しい体でござえして、とこあういう塩あんば梅いに遣いツつけました。目を円いくして驚おきやあがつて、可笑おしゆうがしたぜ、飛んだ面白あえやと、それを嬉あしがつていやあがる、始末におえねえじやアありませんか。それがまた似合あうんです、ちよいとこんな風、一と紋床ものずきも好事あなり、ばりかんを持つたまままで仕事の最中。

「成程、」といって金之助も故とらしく振返った。

愛は極悪きまりげに、

「親方沢山だ、何も身振みぶりまでするこたアありません。」と愛くる

しい件くだんの口許で、ベそを搔くような（へ）の字形なり。

「私わっしにや素直だから可愛いんですがね。どうだこう改つて言われ

ちやあ余り見ツとも好いいこツちやあるめえ、ちつと気をつけるが

可いいぜ、え、愛こころ的。」

「可いいやさ、罷まかり違ちがえばという覚おぼえがあるから世の中を何とも思

わんだらう、中々可い腕があるんだっていうじやあないか。片腕

ツていう処あたまだが、紋床の役介者は親方の両腕だ、身に染みて遣り

や余よそ所ゆき行あたの天窓あたまを頼まれるツて言っていたものがあるよ、どうだ

い。」

「へ、……どういたして、こうなると私わつしきまりあ極が悪い、」と面おもてを背けて、たじたじになつた罪の無さ。

「ここらで発起をすることつた、また三晩ばかりあけたというじゃあないか。あのここな、」というのがちと仮こわいろ声になりかけたので、この場合吃びっくり驚し、紋床は声を吞んでくすりと笑う。

「ですがね親方、今度ばかりや、」と愛吉は吃きつと真面目まじめ。

四

「どうした。」

「ええ、何ね、少し面白くねえ、馬鹿に癪しやくなことがあつて、腹が立たつて、私わつしあ腹が立たつてならねえんで、」と愛はいう内にもその迫おつた眉を動かすのであつた。

紋床は、しばしばあつて、珍めづしからぬ、愛吉がかかる様子に馴なれて、いうことを何とも思わず、

「妙だな、お前まへまた腹が立たつて為し様ようがないから、そこで身か体らを寝かしていたろう。」

「親方、茶かさずにさ、全くだね、私あ何だ、演し劇ばいでする敵かたきツてものはちようどこんなものだろうと思おもいますぜ、ほんとうに親おの敵かたき。」

「可いい気きなことを言いつてらあ、お前めえお母お親くろは死しんでやしねえじや

ないか、父ちやん爺の敵なら中気だろう、それとも母おふくろ親なら、愛こころ的、お前がその当の敵だい。」

「何だつてね。」

「苦勞をさせるからよ。」

「気が早いや親方、誰も権太左衛門に母親が斬られたとは言やしません、私あ親の敵と思う位、小癩こしやくに障る奴やつが出来たツていうんです。」

「はてな。」

「それでね、出来るものならふん捕つかえて畜生撲なぐり殺ころしてやろうと思つて、こう胸ツくそが悪くツて、じつとしていらねえんで、まったくでき、ふらふらして歩ある行いたんで。」

「待ちねえ、おい、お前感心だな、ははあ解つたい、そうするとお前は大望のある身体からだだ、その敵討をしようという。」

「そうですよ。」と真顔でいった。

「そうですよもねえもんだ、何だな、それがために浮身をやつ窶し、

茶屋場の由良さんといった形で酔潰よいつぶれて他愛々々よ。月が出て

時ほととぎす鳥なが啼くのを機掛きっかけに、蒲鉾小屋かまぼこやを刎はねあ上げて、その浴衣で

出ようというもんだな、ははははは。」

「ようがすよ、もう沢山だ、何もそんなに改つて今日という今日、脂を取んなさるこたあねえ、食潰くいつぶしの極道にやあ生れついて来たんだもの、天道様だつて数の知れねえ人形こしらを拵けずりえるんだ、削くず屑ずも出まさあね、」と正直なだけに怒りッぽい、これでもまだ

若いんだから、愛吉は拗すね気味で横を向く。

「ほい、気に障ったら堪忍しねえ、言つたつて治らねえ位のこたあ知ってるんだい、言葉の機はずみよ、己おれだつてまだ人に意見を言う親おやじがた仁形は役不足だ、可いいいや、喧嘩なら加勢をしよう、対あいて手は何だ。」

「そ、それがね親方、」とたちまち嬉かおつきしそうな顔色で、

「ちつと組合違いの人間でさ。」

「ふむ、船頭か。」

「いいえ。」

「馬うまかた士か。」

「詰らねえ。」

「まさか乳母おんばどんじやあるめえな。」

「親方、真面目に聞いておくんなさいというに。聞くだけで可いんだから、私わっしあまた話すだけでもちったあ胸が透くだろうと思うんで。へい、ここの処とこへ込上げて来やあがつて。」と手を懐にしたまま拵げた胸ななめに斜にかかつてる守まもりの紐ひもの下あたりを、はたはたと叩いて見せる。

「可よし可し、私が聞こう、どうしたんだ。」

「先生、聞いておくんなさるか、難ありがて有え、こりや先生だとなほわかりが早い、対あいて手はね、先生なんざ御存じじやありませんか、歌の師匠ですよ。」

紋床は口を挟んで、

「ああ、中洲の清元の。なるほどこいつあ大望だ、親の敵より大お事おごとに違えねえ、しかし飛んだ気になったぜ、愛、お前めえありやあ不可いけねえや、まるで組合が違つてらあ。」

「何がえ、親方。」

「お津賀さんのことだろう。」

「ありや、師匠じゃありませんか。」

「唄の師匠よ。」

「何を、私なあ味噌ひとこし一ひとこし漉ひてえやつなんです。」

「味噌一漉？ ああ三十一みそひともし文字か。」

「その野郎だ。」と、愛吉は胸を張つた。

五

「歌の先生、三十一文字の野郎で、それが敵、へい、」とばかりで紋床も変に思い、金之助もその意を得ない様子である。

愛吉は熱心面おもてあrawに顕れ、

「先生、貴客あなた知っていらつしやりやしませんか、その三十一文字

の野郎てえのを、」

「何というね、そしてどこの、」

「居る処は根岸なんで、」

「根岸か、」

「へい、根岸の加茂川わたる巨ツてんです。」

「加茂川亘。」と金之助は口の裡うちでその名を言った。

紋床は背後うしろへ廻つて、

「神主様みてえだな。」

金之助は更あらためて打うち領うなずき、

「有名な先生だ、歌の、そうそう。書ても能よくお書きになるぜ。」

「知ツてますよ、手習師匠兼業の奴やつこなんで、媽かかあ々が西洋の音楽と

やらを教おえて、その婆ばばあがまた、小笠原礼法しつけ方かた、活いけ花ばな、茶

の湯あきなを商あう、何なんでもごとたごと娘むすめ子この好すな者ものを商法しょうぽうにするツて

いいます。」

「ははあ何でも屋やだな、場末ばつまつの荒物屋あらかさにやあ傘かさまで商あつてら、行

届といたものだ。虱しらみでも買かいに行いつて捻ひねつてやれ、癖くせにならあ、ど

うせ碌ろくな者は売るんじやあねえ。」と紋床は話まことが実で、ものになり
 そうな卵だと見て取ると、面白おおいしで大あおに煽る。

金之助は驚いて、

「馬鹿なことを言え、罰の当った、根岸の加茂川と来た日にやあ、
 歌の先生でも皆みんなが御前々々と言う位なもんだ。宴会のあつた時、
 出ていた芸妓げいしやが加茂川さんちよいとと言つたら、売女ばいた風情が御
 前つかまを捉えて加茂川さん、朋友ともだちでも呼ぶように失礼だ、と言つて、
 そのまま座敷を構われた位いきおいな勢よ。高位高官の貴夫人令嬢方、解
 らなけりや、上うえツ方の奥様がた姫様ひいさま方、大勢お弟子があるツさ、場
 末の荒物屋と一所にされて耐たまるもんか、途方もない。」
 「何でも、馬車だの腕車くるまだのが門に込合くわつてゐるツて謂いいますね。」

「そうだろうとも。」

「何だか知らねえが癪しやくに障るツたらないんです。」

と愛吉はさも口惜しそうである。

「おい、その方が敵かい。」

「お前めえまた妙な敵を持ったもんだな、金と女わっしなら私だつて殺してえほど怨うらみがあらあ、先せんの中洲の清元の師匠の口だと、私も片棒担かつぐんだが、困つたな歌の先生じゃあ。お前どうした、狙つたか、」

「二晩ばかりつけました、上野の山ね、鶯うぐいすだに谷ステッキね、杖でも持ち

やあがつて散歩とでも出掛けてみる、手前活てめえいかしちやあ帰さねえつ

もりで、あすこいらを張りましたけれど、出ませんや。弱つちま

いました、親方の前めえだけれども。髪結床かみいどこの下したじよく職なんぞする

もんじやアありませんね、せめて字でも読めりや何とか言つて近づくんですが、一の字は引張つて、十文字は組違え、打交えは鷹の羽だと、呑込んでいるんじやあ為方ありません、私あもう詰らねえ。」と力なさそうに投首をする。

「ああ、お互に不便なもんだ。」

「親方本当でございますね、酒の値は上りまさ、食る物は麵麩の附焼、鰻の天窓さ、串戯口でも利こうてえ奴あ子守兎かお三どんだ、愛ちゃんなんてふざけやあがつて、よかよかの飴屋が尻と間違えてやあがる、へ、お忝。」といつて、愛吉はフンと棄鉢の鼻息。

「あいや、敵討のお武家、ちとお話が反れましたようですが、

加茂川が何か君に恥辱でも与えたというのかい、」

「そうです、恥を搔かしやがつたんで、あいて相手は女ですよ。」

「何、女に恥辱を、待て、たち質のよ好くない奴だ。」

ちようど洗いましょうという処、金之助は膝を叩き、あたり四辺を払つて、ついと立つた。

「や、先生も味方らしい、こいつあ、ありがて難有えぞ難有えぞ。」

六

いだだ戴いたのは新しい夏帽子、着たのは中形の浴衣であるが、きつ屹と改まった様子で、五ツ紋の黒絹くろろの羽織、白足袋、おもてうち表打の駒下

駄げた、蝙蝠傘こうもりがさを持ったのが、根岸御院殿寄よりのとある横町を入つて、

五ツ目の冠木門かぶきもんの前に立つた。

「そこです、」と、背後うしろから声を懸けたのは、二度目を配る夕景

の牛乳屋の若者わかいもので、言い棄てると共に一軒置いて隣となりやしき邸へ

入つた。惟おもうにこの横町へ曲ろうという辺あたりで、処を聞いたものら

しい。加茂川の邸へはじめての客と見える、件の五ツ紋くだんの青年わかもの

は、立停たちどまつて前後あとさきをみまわして猶予ためらつていたのであるが、今牛乳ちち

屋やに教えられたので振向いて、

「は、」と、頷うなずくと斉ひとしく門を開けて透すかして見る、と取着とつつきが白

木の新しい格子戸、引込ひっこんで奥深く門から敷石が敷いてある。右

は黒板塀でこの内に井戸、湯殿などがあるという、左は竹垣で

ここから押廻して庭、向うに折曲つて縁側が見えた。

一体いつもこの邸の門前には、馬車か、俵か、くるま当世の玉の輿こしの着いていないことはない。居廻いまわりの者は誰謂いうとなく加茂川の横町を、根岸の馬車新道と称とえて、その狭められるために、豆腐屋油屋など、荷のある輩やからは通行をしない位であるが、今日は日曜故か、もう晩方であるためか、内も外も人少なげに森しんとして、土塀の屋根、樹の蔭などには、二ツ三ツ蚊の声が聞えた。

されば敷石を鳴ならす穿物はきものに音立てて、五ツ紋の青年わかものはつかつかとその格子戸の前。

ちようどここへ立つた時分に、今開けた門の、からからと鳴る、ばねつきの鈴りんの音が止やんで、あたかも可よし、玄関へ書生が取次に

頭あらわれて、あえてものを言うまでもない。

黙つて、坐つて、手を支ついて、顔を見て、澄して控える。

青年わかものは格子戸を半ば引いたままで、慇懃いんぎんに小腰を屈かがめ、

「御免下さいまし。」

「はい。」

「ええ、お友達、御免下さいまし、御当家、」と極きまつて切口上で

言出した。調子もおかしく、その蝙蝠傘を脇挟んだ様子、朝ちようせ

夕き立入る在来の男女とは、太いたく行方ゆきかたを異ことにする、案ずるに蓋けだ

し北海道あたりから先生の名を慕つて来た者だろうと、取次は瞶みつ

めたのである。

青年わかものはますます鄭重ていちょう、

「いかがでございましょうか、お友達、御当家先生様にお目通めどおりが出来ますでございましょうか。」

「あなた貴方はどちらから、」

「ええ、手前事は、ええ何でございまして、そのあれでございませよ。」

「はい、」

人の内の取次というものは、いかなる場合にも真面目なものなり。

「お友達御免を蒙こうむります、手前はその日本橋人形町通り、勝山と申しまして、」

「勝山さん、」取次は聞き馴なれないという顔かおつき色。

「いえ、手前がその勝山と申すんじやあございませんで、」

「ははあ、」

「御当家先生様の、ええ、お弟子でございまして、その勝山と申しますお嬢さんからちよいと頼まれました、手前使つかいの者でござい
ます、少々お目に懸かかりとうございますが、お宅でいらつしやいま
しょうか、お友達、お取次を願ねがいとう存じますんで、へい。」

「先生はお宅ですが、ちよいとお待ち下さい、」と妙な顔をして
取次はくるりと入った、青年わかものは我を忘れた風でひよいとその頸うなじ
を縮すくめたが、立直つて、えへん内証の咳せきばらい一咳。

「さあ、こちらへ、私が加茂川で。はあ、」と仰向あおむいて挨拶をする。これはあえて人を軽蔑するのでもなく、また自ら尊大にするのでもない。加茂川は鬼神おにがみの心をも和やわらぐるといふ歌人うたびとであるのみならず、その気立が優しく、その容貌も優しいので、鼻下、頤あぎとひげは貯たくわえているが、それさえ人柄に依つて威嚴的に可恐こわらしゅうはなく、かえつて百人一首中なる大宮人の生はやしたそのように、見る者をして古代優美の感を起さしむる、ただしちと四角な顔で、唇は厚く、鼻ひらたは扁ひらたい、とばかりでは甚だ野卑に、且つ下俗に聞えるけれども、静しずかに聞きこ召しめせ、色が白い。

これで七難を隠すといふのに、嬰あかご児ごも懐なつくべき目附と眉の形の

物やわら和かき。人は皆鴨かもがわ川（一に加茂川に造る、）君の詞藻は、その眉びう宇の間に溢あふれると謂いうのである。

かかる優美な人物が、客に達するに（はあ、）の調子で仰向くとなつては、いささか性格において矛盾するようであるが、これをいう前に、その和やわらぎのある優しい一双の慈眼を（はあ、）と同時に糸のように細うしてあたかも眠るがごとくに装うことを断つておかねばならぬ。

その上にいかなればしかするかの理由を説明したら、ますます鴨川の奥床しい用意のほどが知れるであろう。

紋床でも噂があつた、なおこの横町を馬車新道と称となえるのでも解る、弟子の数が極めて多い。殊に華族豪商、いずれも上流の人

達で、歌と云えば自然十が九ツまで女流である。

それのみならず、令夫人が音楽を教えて、後室が茶の湯生花の指南をするのであるから。

若き時はこれを戒むる色にありで、師弟の間でもこの道はまた格別。花のごとく、玉のごとき顔かんばせに対して、初恋しのぶこい、忍しのぶこい、恋た、互たがいにおもうこいい

思お、恋れなどという、安からぬ席題を課すような場合に、どんな手て爾に遠を波はの間違をが出来ぬとも限らぬ。人木石にあらおれれず己おも男おだ、と何も下司げすにタンカを切ったわけではない。歌うた人びとが自分うで深ふかく慮おもんばか、すべて婦人の弟子に對する節は、いつもその紅べに、白おしろい粉こ、簪かんざし、細こい手て、雪ゆきなす頸うなじ、帯おび、八や口つくちを溢あふれる紅くれない、裊つま、帯おび揚あげの工ぐ合あいなどに、うあつかりとも目の留ままらぬよう、仰まなこ向こいて眼まなこを塞ふぐの

が、因習の久しき、終に性質となつたのである。もつとも有数の秀才で、およそ年紀二十ばかりの時から弟子を取立てた。十年一日のごとく、敬すべき尊むべき感謝すべき心懸けであるから、音楽に長けたる鴨川夫人が、かつて弟子の中の一人であつたことをもつて、毫も先生の品行を怪んではならぬ。

世には夫人が、おもて向き結婚してから八月目というのに、女兒を流産したといつて、云々する者もあるけれども、經典に言わずや、鶴は相見てすなわち孕む、それ歌人はこの濁世に処して、あたかも鳶鳥の中における鶴のごときものであるから、結婚の前、既に疾く兒を宿さぬという数はあるまい、従つて八月で流産しないとも限らぬのである。夫人は名を才子という、細川氏、父

ちぎみ

君は以前南方に知事たりしもの、当時さる会社の副頭取を勤めておられる。この名望家の令嬢で、この先生の令閨で、その上音楽の名手と謂えば風采のほども推量られる、次の室の葭戸のあなたに薔薇の薫ほのかにして、時めく氣勢はそれであろう。

五ツ紋の青年は、先刻門内から左に見えた、縁側づきの六畳に畏つて、件の葭戸を見返るなどの不作法はせず、恭しく手を支いて、

「はじめましてお目に懸ります。」

八

「はあ、貴方あなたがその勝山さんのお使つかい？」と大人うしは紅革べにかわの夏蒲なつぶと団だんの上に泰悠たいゆうにおわす。此方こなたは五ツ紋の肩をすぼめるまで謹こんで、

「さようでございます、へい。」

「御親類の方ですかね。」

「いえ、親類と申しますでもございせんが、ちと懇意こんいに致いたしますもので、ついこの坂下まで手前用事で参まゐりましたに就あいて、彼あ家ちちらから頼たのまれてまして、先生様の御邸ごていへ伺うかがいますように、かねてお世話せわに相成あります御礼ごれいを申上げますよう、またどうぞ何分なんぶんお願い申上げますようにと、ことづかりましたんで、へい、めつきりお暑あつうぐざいますな、」たもとといいながら、袂たもとを探たねると白地しろぢの手拭てぬぐい

を取出して額を拭った。

「はあ、何、それはわざわざ。」

「実は母親が参ります筈はずなんですが、一体このとかく病身な上、貧乏暇なし、手もございませぬ処から、相済みませんが失礼をいたしましたして、」といいかけてまた額の汗を。見る処人形町居廻りから使に頼まれたというが堅気かたぎの商人あきんどとも見えず、米屋町辺の手代とも見えず、中小僧という柄にあらず、書生では無論ない。年若には似ない克明な口上振、時々ものいいの洩るとい、何でも口うつしに口上を習つて路々暗誦でもして来たものらしい。

かかる肌はだちがい違ちがいのものに対しては、鴨川大人口を開いて、あえ

て上五文字をも吐くに当らず、

「はあ、」とばかりである。

葭戸を下の方から密と開けて、大形の茶碗の底へ、ぽちちり入った結構らしいのを、畳の上へすべひらすようにして客の前に推して据えた、高島田の面長で色の白い、品のい可い、高等な中形の浴衣、帯をお太鼓に結んだ十九ばかりの美人。

五ツ紋の青年は、わかもの斜にちよつと見たばかりで、はツと言つて頭を下げ、

「恐入ります奥様、ええお控え下さいまし、手前から申上げます、日本橋区人形町通、」と俯向うつむいたまま手について言った。

茶を持って出た美人は、敷居の外へ半分ばかり出した膝を揃え

て支いたまま、呆あつ気に取られたが、上目づかいで鴨川の面を窺おもてうかがうと、渠かれは目を瞑ねむつて俯向きながら、頤あご髯ひげのむしやとある中へ苦笑を包んで、

「可よし、」と頷うなずいて見せたので、葭戸を閉たててすつと消える。

「小間使でありますよ。」と教えたが、耐たまりかねたか、ふふと笑った。青年わかものの茫然ぼんやり拍子抜のした顔を上げた時、奥かたの方で女の笑声。

此方こなたは面を赤うして、手拭てぬぐいを持った手を額かぶにあて、

「これはどうも、手前ふつつか不束ふつつかものでございます、へい、実は奥様にはお目に懸かかつてよく御礼をと申しつけられましたものでございますから。ええ、何でございましょうか、奥様はお邸でいらっし

やいませようか。」

「はあ、居おりますか。」

「いかがでございませう、ちよいとお目に、」と御身おみぶん分柄、お家柄、総じては日本の国風を心得ないことを言うのである。

鴨川は眉を顰ひそめたが、さあならぬ調子で、

「面会日は別にあるです。」

「へい？」

「あれが皆様に別に面会しますのは水曜の午後です。」

「水曜の午後でございませうか。」

鴨川は至極冷淡に、

「はあ、」

五ツ紋の青年わかものは何か仔細しさいありげに、不心服の色を露あらわした。

九

「ですが、何も別してお手間は取らせません、ちよいといかがでございましょう。」

「誰にも皆みんなそういうことになっておるですから、」

「へい、ごもつとも様ですが、そこん処をそのお繰合せ下さいまして。」

「たつてお逢いなさりたい?!」と鴨川大人うしきつぱりとなる。

五ツ紋は慌てた形で、

「いえ、たつてと申す訳ではございません。」

「そして何の用ですな。」と改まって尋ねられた。

「その勝山から託ことづかりましたので、奥様にもお目にかかつて御挨拶を。」

「はあ、何、それなれば別にお会い下さるにも及びませんですよ、私から申聞けましょう。そして遠い処をわざわざおいで下さるにも及ばんでした、貴方御苦勞でしたな、宜しくどうぞ、ちとこれから出懸うたびとけんければならんですから。」

歌人の住居すまいも早や黄昏たそがれるので、そろそろ蚊遣かやりで逐出おいだしを懸けたまえば、凶々しいような、世馴れないような、世事に疎いような、また馬鹿律義でもあるような、腰を据えた青年わかものもさすが

にそれと推した様子で、

「これはどうも飛んだお邪魔をいたしましたしてございます、勝山のあの娘も不束なものでございますから、どうぞまた先生様、何分、」と、ここでまたぴったりと平蜘蛛ひらたぐも。

「はあ、それは宜しい、」ともう片膝を立てそうにする。

青年わかものも座を開いてちよいと中腰になったが、懐に手を入れる

と、長方形の奉書包、真中まんなかへ紅白の水引を懸けてきりりとした貫目のあるのを引出して、掌てのひらに据え直し、載せるために差して来

たか、今まで風も入れなんだ扇子を抜いて、ぱらぱらと開くと、恭うやうやしく要かなめを向うざまに畳の上に押出して、

「軽少でございますが、どうぞお納おさめを。」

と見ると金子五千疋、明治の相場で拾円若干を、故と古風に書いてある。

「ああ、こういうことをなすつては可いけません、そのために、ちやんと月謝をお入れになることにしてあります。」

「さようおつしやりましてはお可愧しゆうございます、誠にお麓末で、どうぞ差置かれまし。」

「そうですか、皆様にもうかねてお断がしてあるんだのに、何かこういう御心配をなさるから困るよ、ああ、とかく御婦人方は、」と云いながら、その細い目でふと葭戸の内を見着けた。

「おお、お才、そこに……お前差支えがなくばちよつとお逢いなさい、こちらで、」と声を懸ける。

「はい、」と案外軽い返事、さやさやと衣きぬの音がして葭戸越に立姿ちかづつが近いたが、さらりと開けて、浴衣がけの涼しい服装みなり、緋ひの菱ひ田鹿つたがの子の帯揚をし、夜会結びの毛筋の通った、色が白い上に雪においに香よそおいのする粧よそおいをして、艶あでやか麗あでやかに座に着いたのは、令夫人才子である。

「いらつしやい、誰方どなた、」と可愛い目つれあいで連つれあい合あの顔あをちよいと見る、年とし紀しは二十七だそうだが、小造こづくりで、それで緋ひの菱ひ田鹿つたがの子の帯揚このみという好このみであるから、二十はたちそこそこに見える位、もつとも十九の時ちごまげ児ちごまげ鬘こに結ひめつた媛ひめで、見る者は十四か五とよりは思わなかつた。早朝上野しのばずの不しのばず忍しのばずの池はすみの蓮はすみ見あるに歩ある行あるいて、草あの露あのいと繁かたづまきに片かたづま褌かたづまを取り上げた白脛しらはぎを背後うしろから見て、既に成女の肉

附であるのに一驚を喫した書生がある、その時分から今も相変らず、美しい、若々しい。

不意の見参げんざんといい、ことに先刻さつき小間使を見てさえ低頭平身した青年わかものの、何とて本尊に対して恐入らざるべき。

黙ぬかつて額着ぬかくと、鴨川大人は御自慢の細君、さもあらんという顔色かおつき、ぐツと澄して、

「勝山さんの使の方です。」

十

「そう、貴方よくいらつしやいましたね、勝山さん、あのお夏さ

ん、お変りはないの、ああ、ついこないだおいでなすつたのね。」
 ともつての外御懇のお言葉。

「人形町からでは随分ある。」と鴨川は打うち領なずく。

「貴方もあの辺なんですか。」

青年わかものはやつと口が利けた。

「へい、近所でございまして、」

「遠いんですね、腕車くるまでも随分暑かつたでしょう、宅おに居りまし
 ても今日あたりはまた格別なんです、」といいながら純白な麻を
 細く襲かさねた、浴衣でも上品な襟しじを扱うしろいて背後を振向き、

「定や、団扇うちわを持っておいで。」

小造な若い令夫人は声を懸けて向直つたが返事をしなかつたの

で、

「貴方はばか憚り様ですが呼鈴よびりんを、」とお睦まじい。

すなわち傍かたわらなる一閑張いっかんぱりの机、ここで書見をするとも見えず、

帙ちつり入の歌の集、蒔絵まきえの巻まきた蓑たばこ入、銀の吸殻おとし落などを並べてあ

る中の呼鈴をとんと強く、あと二ツを軽く、三ツ押すと、チン、リンリンリン——と鳴る、ばたばたと急いで来て、

「はい、」といって顔を出した以前の小間使、先刻意を了したと

見えて二本ばかり団扇をそれへ差出す折から、縁側にあしおと登音して、

奥の方から近ちかづいたが、やがてこの座敷の前の縁、庭樹を籠こめて何

となく、隣家となりのでもあるか蚊遣の煙の薄うつつりと夏の夕を染めたる中

へ、紗しやであろう、被布を召した白髪しらかを切下げの媼おうな、見るから気高

い御老体。

それともつかぬ状さまで座敷を見入ったが、

「御客様かい、貴方あんた御免なさいよ。」といつて座に着いた。

「灯あかりをね、」と顔をさし寄せて、令夫人は低声こゝえでいう。

夕暮の徒然つれづれ、老母も期せずしてこの処ほかに会したので、あえて

音楽に關して弟子に対する他ほかは、面会日ふれが水曜と触ふれの出た令夫人

が、次の室へやに居合せたり、奥深く世を避けておわす老母が縁側に

来合せたりするのが、謝礼金五千疋けだを持参の者に対する鴨川家の

家風ではない。青年わかものは蓋し期せずして拝顔を得たのであった。

「お初に。どちらの、」とこれも鴨川をちよいと御覽ずる。

「勝山さんのお使ですって、」と令夫人かたわら傍から引取つて引合せる。

「おお、あの何か江戸ツ子の、いつも前まえ垂掛たれけでおいでなさる、活漥なな、ふアふアふア、」と笑つて、鯉こいが魅ふを呑んだような口附をする。

ト一人でさえ太刀打のむずかしい段だん違ちがの対手あいてが、ここに鼎かなえと座を組んで、三面六臂ろつびとなつたので、青年わかものは身の置場に窮きつした形で、汗を拭ふき、押拭おしい、

「へい飛んだ御厄介様で、からもうお転婆でございまして、」

「可よいさ。だがの、内なぞは傍はたのおつきあいがおつきあいじやで、そこはまたな、御婦人じやから直接じかにいつては赤い顔でもなさると悪いで申さんじやつたが、前掛は止して袴はかまになさるなぞは、まず第一のお心こころ懸がけじやよ。いや、しかし貴方あなたの前じやけれどお

夏さんは珍しい御容色ごきりようよし、ほんのこと内なぞはおつきあいがおつきあいじやから、御華族様から大商人おおあきんど方がたの弟子も沢山見えるけれど、品うえといい様子がたといいあのお娘こが一番じや。よくしたもので、上うえつ方はまあ少々はおでこでもそこは事が済みますが、下しも々の娘こが出世をしようというには、さらりと打明けた処きで容色りようじや。面じやの、ふアふアふア、お夏さんなぞは心懸次第またどんな出世でも出来るのじや、こつちへ出入ではいつてござればおつきあいがおつきあいじやから、ふアふアふア。」と鯉ふをのむ吞麩のむの口、蕪村すずきがいわゆる巨口玉を吐く鱸すずきと相似て非なるものなり。

青年わかものはこれに答すべうる術すべも知らぬ状さまに、ただじろじろと後室の顔みまもを瞻みまもつたが、口よりはまず身を開いてしりごみ逡巡しりごみして、

「ええ、からもう、」というばかり、逡巡しりごみの上に、なおもじもじ。

「一体何じゃ、内へござる他ほかの方とはちと気風が違っていなさるから、その辺が何となく御身分のある方とはお交際つきあいがなさりにくいのじゃ、それも心こころ懸がけ一ツで、の、ああどうともなります。」と念を入れて喋舌しゃべれば顔も動くし、白い切髪も動いたのである。

「さようでございましょうか、へい、」といってこの泥に酔った

ような、あわれ哀な、ふが腑効ない青年わかものは、また額を拭つた。汗は流るるばかり、ほとんど取乱した形に見えたので、おほ夫、おくがた人才子は、さすがに笑止とや思しけん、

「貴方まあお羽織をお脱ぎなさいませよ。」と深切におつしやりながら、うちわづかい団扇使の片手あおぎ煽に、風を操るがごとくそよそよと右左、勿体ない、この風にさえ腰も据すわらないほど場打ばうてのしている者の、かかる待遇に会して何と処すべき。

わかもの青年はそわそわしたが、いつの間にか胸紐を外して、その五ツ紋を背後うしろにはらりと、肩をすべこらして脱いだのである。

「じゃあ御免を被やッつて遣やッつけますぜ。」と素頂すってんぴん天にぞんざいな口を切つて、たもと袂の下を潜くぐらすと、脱いだ羽織を前へ廻して、おくめ臆

面もなく、あなた方の鼎かなえに坐つた真中まんなかで、裏返しにしてふわ

りと拵しらげた。言語道断、腕まくりで膝を立て、

「借もんだからね、皺しわにしちやあ動きが取れませんや、」と、切上つた眦まなじりに筋を集めてニヤリと笑つた。

余りの思懸けなさに、鴨川の一家いっけ、座にある三人、呆氣ひまに取られる隙もなく、とばかりに目を見合せた。中にも才子はその衝ひまに当つたから、風が止やんだようにじつとする。

青年わかものは身を斜めに、肩を揺ゆすつて才子に突懸つっかけ、

「煽あおぎねえ、へ、奇代な風だ、心持の可い日和だい。遠慮をする

こたあねえぜ。こう聞きねえ、実はその団扇使を待つてたんだ。

様さまあ見やがれ、」というと、嶮のある目を屹きつと見据え、今なお座

中に横よこたわつて、墨色あざやかも鮮あざやかに、五千疋とある奉書包つづに集めた瞳を、人指指さきの尖さきで三方つづへ突き廻し、

「誰はを煽ほいだつもりだよ、五千疋のお使者が御紋服の旦那だと思
うと、憚はばんながら違います。目先の見えねえ奴等じゃあねえか、

何だと思つてやあがるんだ。手前ことはね、おい、御当所日本橋

は人形町通よ、赤煉瓦の学校裏、紋床やっかいに役介しただぞになつて下

剃りの愛吉うわがきてえ、しがねえものよ。串じょうだん戯あそびじゃあねえ、紙包しやうたんの

上うわがき書かばかり下目遣いで見てないで、ちツたあ御人体ごじんていを見て物
を謂いいねえ。」

「これ！」と向直つて膝に手を置いた、後室は育そだち柄から、長刀ながなた
の一手ひとても心得こころえているかして気が強い。

「何を。」

「何じやな、汝きさまは一体、」と大人うしは正面に腕を組む。令夫人はものもいわず衝つと後向きになりたまう。後室は声鋭く、

「無法者め！」

「いよ。お婆々ばば、聞えます聞えます、」

羽織を脱いで本性をあらわした、紋床の愛吉は薄うす笑わらいをして、「歌の先生、どうだ歌先、ちよつと奥さん、はははは、今日こんにちア。」と、けろりと天井を仰いだが、陶然として酔がえる顔色んしよく、フフンと

いって中音になり、

「——九やまいは病五七の雨に四よツひでりサ——」

襖も畳も天井も黄昏の色が籠ったのに、座はただ白け返った処へ、一道の火光颯と葭戸を透いて、やがて台附の洋燈をそれへ、小間使の光は、団扇を手にしたまま背向になつている才子の傍へ、そツと差置いて退ろうとする。

「待ちねえ。」

というが疾いか、愛吉は手を伸してむずとその袂を捉えた。

「あれ、」

「遁げるない、どうだ、謂うことを肯かねえか、応といやあ夫婦になるぜ。」

「御串戯ごじょうだんを遊ばしまし、」と女中は何事も知らないのであるから、つい通りの客とばかり、酒も飲まないのにと、驚いて変に思う。

「何、串戯なものか真剣だ、ずっと寄んねえ、内証ないしよ話は近い方がいい、」と、ぐいと引くと、身体からだが斜ななめに靡なびく処を、足を挙げて小間使の膝の上に乗せた、傍若無人の振舞。

「何をするか、」

「光!」と堪たまりかねて大人と後室、一いつは無法者を、一は小間使を、ほとんど同時に同音に叱咤しったした。

小間使こそ、膝は犯される、主人には叱られる、ばたばたと身を悶もたえ、命の瀬戸際と振放してフイと遁にげた。

愛吉は腕を反し、脚を投出したまま哄然として、

「ははははおもしろい、汝！ 嫌われて何がおもしろい。畜生、」
 と自ら嘲つて、嚏を仕損つたように眉を顰め、口をゆがめて頬
 桁をびっしやり平手でくわらし、

「様あねえ、こんなお大名の内にも感心に話せそうなのが居ると
 思つたがやつぱりいけねえ、ぐうたらのおたんちんだ。我が顔つ
 きが気に喰わねえそうだ、分らねえ阿魔じやあねえか。やい、」
 と才子が踵をかかへた腰に近き、その脚で畳を蹴たが、頤を突出
 した反身の顔を、鴨川と後室の方へ捻向けて、

「汝等一体節穴を盗んで来て鼻の両方へ御丁寧に並べてやあがる
 な。きよろきよろするな、こう睨むない、蛙になるぜえ、黙つ

て目を瞑ねむつて、耳の穴を開けて聞け。私等わつちらが畠はたけのよ、勝山さんのお夏なつさんを何だと思つてるんだ、何と見損みこいやあがつたい、いけ巫山ふざけ戯た真似まねをしやあがつて、何だ小股こまたがしまつてりや附合つけあがむずかしい？ べらぼうめ、憚はばかながら大橋おほしからこつちの床屋とどろはな、山の手の新店あたらだつても田舎いんの渡わたり職しよく人にんと附合つけあはしねえんだ、おともだち、お気の毒あはれだが附合つけあはこつちでお断ことわりだ。

それもよ、行儀ぎよなら行儀ぎよをしつけようてえ真実まことからした事ことなら、どうせお前めえたち達はお夏なつさんにやあお師匠しせう様だ、先生せんせいだ、私わっちが紋床もんじの拭掃ふきそうじ除をするのと異かわりはねえ、体操たいそうでも何でもすら。そうじやあねえか、これがな、お前めえか、婆ばあか、またこの御新造ごしんぞさま様なら仔こ細さいはねえ、よしんば仔細こさいがあつた処ところで泣なく子こと地頭ぢぢうだ、かれこれ

いつて来る筋じゃあねえ。へん、何曜日とやらの午後でなくつちやあ面つらあ出さねえとおつしやる方が、少しばかり実のある紙包が出るよ、たちまちおひきつけへ出てござって、どうだい、下剋のこの愛的ここうを団扇あおで煽あおぐだろうじゃねえか。第一、婆おばの空お世辞せじが気に入くわねえや、何ていう口つきだ、もう一度あの、ふアふアを遣やらねえか。いや、譬たとえようのない異変いへんな声だぜ、その饒舌しゃべる時の齒ぐきの工合くわいな、先生様の嫌な目つきよ、奥方のこの足のうらまでちゃんと探たん鑿さくが届といて、五千疋で退治たいぢに來たんだ、さあ、尋常じんじょうに覚悟かくごをしやがれ、此奴等こいつら！」

愛吉は瘦やせたのを高胡坐たかあぐらに組んで開き直る。

十三

「震えるない震えるない、何もそう、鮭しやけの天窓あたまを刻むようにぶりぶりするこたあねえ、なぐり込に來たのなら、櫛たすきがけで顛はちまき巻よ、剃かみそり刀でも用意をしていらあ。生命いのちに別条はねえんだから騒ぐにやあ当らねえ、おう、奥おくさん様ちよいと、おい、先刻さつきのようにお暑うございますとか何とか謂いつて、その団扇わうちで私わたしをば煽煽いでくんねえ、煽煽ぎねえよ、さあ煽煽げ、煽煽げ、煽煽がねえかい。」と、愛吉は目の色の変るまで対手あいての三人を屹きつと睨ねめて、手も足も突張返つっぱりつた。

「母おかあさま様、」と才子は衝つと身を起しざまに、愛吉を除よけて起たつ

た。

「貴郎あなたもお立ちなさいまし、狂人きちがいですわ。」と、さも侮り軽んじたごとき調子で落しめて言うのに和かして、

「狂人だ。」

「うむ狂人じゃ、巡査に引渡すが可いじやろ。」

「さあ、引渡せ、そうでなきやあ団扇で煽げ、」と愛吉は仰向あおむけに寝て大の字形なり、挺てこでも動きそうな様子はな。謂う処に依れば才子に思うさま煽がせさえすれば、畳はやに生はした根も葉も無く、愛吉は退散しそうに見える。

按あんずるに煽ぐという字は火偏に扇である、しかればますます奴やつこのほのおさかんが盛になつても、消えて鎮まるべき道理はないが、そのかか

ることをいい、さることを為すは、深き仔細があつたので。

愛吉は紋床で謂つた、鴨川はその敵で親の仇とも思う怨がある、それは渠がかねて愛顧を蒙る勝山の女お夏というのに就いたことである。

今より五日ばかりの前、振袖立矢の字、児鬚、高島田、夜会結などいふ此家ここには出入の弟子達とは太く趣の異なつた、銀杏いちようがえ返しの飾らないのが、中形の浴衣に縷子の帯、二枚裏の雪駄穿、紫の風呂敷包、清書を入れたのを小さく結んで、これをまくり手にした透通るように色の白い二の腕にかけて、その手に日傘をさした下町の女風むすめ、服装より容色の目立つのが一人、馬車新道へ入つて来たことがあるう、それがお夏であつた。

お夏は人形町通の裏町から出て、その日、日本橋で鉄道馬車に乗って上野で下りたが、山下、坂本通は人足繁く、日蔭はなし、ステエシヨンいまわり
 停車場居廻の車夫の目も煩いので、根岸へ行くのに道を黒門に取って、公園を横切った。

あとさき路は歩いたり、中の馬車も人の出入、半月ばかりの早続きで熱けた砂を装ったような東京の市街の一面に、一条足跡を印して過ったから、砂は浴びる、埃はかかる、汗にはなる、分けて足のうらのざらざらするのが堪難い、生来の潔癖、茂の動く涼しい風にも眉を顰めて歩を移すと、博物館の此方、時事新報の大看板のある樹立の下に、吹上げの井戸があつて、樋の口から溢れる水があたかも水晶を手繰るよう。

お夏は翳かぎしていた日傘の柄を横に倒して熟じつと見たが、右手めでに商品陳列所の外そと囲がわが白ずんで、窓々の硝子がらすがぼやけて見えるばかりか、蟬の声さえ地の下に沈んで、人気はなく、近づいて来る蹙あ音しおともしない。もつともここに来る道で谷中やなかから朝顔の鉢を配る荷車二三台に行逢ったばかりであるから、そのまま日傘を地の上へ投げるように置いて、お夏は吻ほっといきをついた。

十四

腕かいなにかけていた紫の風呂敷包は、輪を外して日傘の上。お夏は袂たもとから手ハンケチ巾を出して、件くだんの水に浸しながら、手を拭ぬぐい、襟を拭

い、胸を拭い、足を冷して埃を洗つて、颯とあとを絞出したが、懐にせんも袂にせんも、びつしより濡れているから、手巾ハンケチをそのまま日傘の柄に持ち添えて、気軽に雪踏せったちやらちやらと、鴨川が根岸の家へ急いだのであつた。

うぐいすだに鶯谷を下りて御院殿を傍かたえに見て、かの横町へ入ると中ほどの鴨川の門の前に、二頭立の馬車が一台、幅一杯になつて着いていた。

月に三度あるいは二度、十四から通うて二十はたちの今まで、いわゆる玉の輿こしがこの門に在ることは、あえて珍しくはないのであつたが、かくまで道を塞いで、縦ほしに横いまま附けになつていたのは、はじめ

もとより豆腐売、油屋など、荷のある類はあらかじめこの一ひとす条の横町は使わぬことになつて居けれども、人一人、別けて肩幅ほっその細りした女、車の齒を抜けても入られそうに見えるけれども、遅たくましい鼠色の馬の面つらが、小鼻を動かし、呼吸いきを吹いて正面まともに門の処すきまに並んで居るので、お夏は日傘を楯たてにしてあなたこなた隙間すきまを差さ覗のぞくがごとくにしましたが進みかねた。

(どなたか、ちよいと、私、用があるんですから。)

声を懸けると三人が三人、三体の羅漢らかんのように、御者台の上と下に仏頂面を並べたのが、じろりと見て、中にも薄髻うすひげのある一ひとす体が、

(用があるなら勝手口へ廻れ、)とつつけんどんに陀羅尼音だらにおんでい

つたのである。

対手あいては馬二匹と男が三人、はじめから気を吞まれてお夏は、

(はい、) といつて、小戾こもどりをして、黒塀の板戸の角、鴨川勝手口とある処へ引返ひっかえしたが、何となくその首こうべを垂れた。

されば誰憚はばかるといふではないが、戸を開けるのも極めて内端うちばじやあつたけれども、これがまた台所の板の間に足を踏伸ばし、口を開けて眈めじりを垂れていた、八ツさがりの飯炊の耳には恐しく響いたので、(騒々しいじゃあないか、誰だよ。)と頓とんきよう興きように、驚かされた腹立紛れ。勝手口から入るものには、この位なことをいつて差支えないのであろう。

(お休みの処を、済みません、)と丁寧ていねいに小腰こゝろを屈かめて挨拶あいさつを

したが、うっかり禁句とは心着かなかつた。飯炊は面を膨らして、
 (へん、ちやぶ屋の姉さんじゃあるまいし、夜更よふけにお客は取りま
 せんからね、昼間寝たりなんかしませんよ、はい、憚はばかりさま様でござ
 いますよ、空いたのはそこに出してあら、)といわずに伸のびを
 して、ふてくされてふいと立つた。小間使はともあれ半季がわり
 の下働かみきは、上の弟子なる勝山さえを知らずして、その浴衣、そ
 の帯、その雪踏、殊ねぼけめに寝惚目ねぼけめなり、おひるに何か取つたらしい、
 近い辺あたりの鳥屋の女中と間違えたのである。お夏は思わず、芙蓉ふようの
 顔かんぱねに紅べにを灌そそいだ。

飯炊が居なくなつては袴はかまを穿はいた例いづもの書生が取次とりつぎに出る場所
 ではない、勝手は分らず、脚くわえて振りつけられたような山出しのむ

く犬を、また呼び出そうという声は持たず、お夏は人いきれに悩んだごとくうっかりしてたたずイんだが、我知らずうるんだ目のまなじり眺めたので左手をゆんで見ると、見透さるる庭の模様、百合の花にも、松の木の振にも、何となく見覚えがある、たしか確に座敷から眺めの処、師の君はかしこ彼処にこそ。

お夏は身を忍ぶがごとく思いなしつつ。

十五

鳳ほうせんか仙花の、草にまじ雑つて 一一 ふたならび並ばかり紅白の咲きこぼるる土塀際をはす斜に切つて、小さな築山の裾をめぐ繞ると池がある。この汀をみぎわ

蔽おほうて棚の上に蔓はびこり重かさなる葡萄ぶどうの葉蔭かげに、まだ薄々と開いたまま、

花壇の鉢に朝顔の淡あざきが種くさね々いろいろ。

あたかもその大輪おおりんを被かいだよう、紹ろうすの羅すもに紅ねの襦じゆ袷ばんを透すかし

て、濃こいお納戸なご地に銀泥ぎんじをもつて水みづに撫なで子しこを描えいた繻しゆ珍ちんの帯

を、背せに高々と、紫菱田鹿むらさきあやめの子の带上おんを派手はでに結むすんだ、高島田たかしまで

品の可いい、縁側えんがわを横よこにして風采かぜ四辺あたりを払はらうのが、飛石とびいしにかかると

眩まぼゆくお夏の瞳ひとみに映うつじた。

机こたえを置いてこれに対し、浴衣ゆいに縮ちりめ緬んの扱しご帯きをめ《し》めて、

肱ひじをつき、仰のげざまの目めを瞑ねむるがごとくなるは、謂いうまでもなく

鴨川鴨川であつた。

二人の中に、やや座ざを開ひらいて控ひかえたのは、すなわちこれ才子さいしの

御方。おんかた

お夏は蝶々鬘の頃から来馴れているし、殊にその時三人が座を構えたる一室のごとき、いつも入込いれごみに教おしえを授かる、居心の知れた座敷ではあつたけれども、不断とは勝手が違つた庭口から案内なしの推参である上に、門でも裏でも取つてつけない挨拶をされた先刻さつきの今なり、来客らいかくの目覚しき、それにもこれにも、気臆きおくれがして、思わず花壇の前に立留うなじまると、頸つまから爪つまさきまで、木の葉も遮からず赫かっとして日光ひが射さした。

才子まともは正面まともに、鴨川は横目に、貴あてなる令嬢を振返つて、一斉こなたに此方こなたを見向いた時、お夏は会釈しよくも仕後しよくれて、畳ハンケチんだ手巾かいを搔か撮まんで前髪まげの処かざに翳かざしたのである。

応とでも言葉がかかれば、取とり継する法もあるけれども、対あ手い方
 はそれなり口も利かなかつた咄とつ嗟さの間、お夏は船納涼ふなすずみの転寝うたたね
 にもついで覚えぬ、冷たさを身に感じて、人心地もなく小刻こきざみに
 つかつかと踵きびすを返した。

鳳仙花の咲いた処でぬつと出て来たのは玄関番、洗あらい晒ざらした
 筒袖の浴衣に、白地棒縞の袴を穿いた、見知越みしりごしの書生で、

(やあ、貴女あなたでありますか、勝手に居た女中が女の明巢あきすね覗のぞが入
 ったつていうですからな。はははは、何を寝惚ねぼけおつて。さあ、
 お通りなさいまし、馬鹿な、)と気抜こけのした様子。

(はい、御門の処に馬車が居て恐こうございましてから間違まちがえてこ
 っちへ参りました、どうも失礼。)

（いや、飛んだ不都合でありました、ずっとおいでなさい。ちやうど御来客で先生はそのお座敷にいらつしやいます。）とこの者だけは調子が可い。

はばかりさま

（憚様ですがちよいとそうおつしやつて下さいましな、またお客様で御邪魔だと悪うございます。）

なあに

やまごうち

ひいさま

（何、山河内様のお姫様で、同じお弟子なんでありますから構いません、いらつしやい。）といい棄てて、この暑いに袴を穿かせるほどの家風、一体婦人を対手の業体、歌所はしつけのいいもので、ニヤリともせず真面目くさり、髭のない男の手持なげに、見事な面砲を爪探りながら、勝手の方に引込んでしまった。

お夏は帰るにも帰られず、折角の取次にも向うから遠慮されて、

太くいた便たよりを失つたが、暑さは暑し弱い身の、日向ひなたに立っていられる
 数すうではないから、止やむことを得ず、思い切つて気の進まないのを
 元の処へ引返ひっかえすと、我にもあらずおずおずして、差俯さしうつむ向いて、
 姫と、師と、その夫人とおわす縁側へ行つて、両手をついたが、
 天窓あたまから叱りつけでもされるように、お夏は消入おもいる思いがした。

十六

お夏はようよう座に着いたが、鴨川が澄して見もせぬ目よりも、
 才子がつんとしている胸よりも、山河内の姫様というのが、膝に
 置いた手の宝玉入の指輪よりも、真まっさき先に気が着いたのは、大人うし

が机の傍そばに差置かれたる、水引のかかった進物の包であつた。

今こそ人形町の裏通に母親と自分と二人ぐらし、柳屋という小さな絵草紙屋をしているけれども、父が存ぞんじょう生の頃は、隅田川を前に控え、洲崎すさきの海を後に抱いだぎ、富士筑波を右左に眺め、池に土塀めぐを繞らして、石垣高く積累つみかさねた、五ツの屋の棟、三ツの蔵いろは四十七の納屋を構え、番頭小僧、召使、三十有余人を一家いっけに籠こめて、信州、飛驒ひだ、越後路えちごじ、甲州筋、諸国の深山幽谷ゆうこくの鬼を驚かし、魔まを劫おびやかして、谷川へ伐出す杉檜松柏ひのきかしわを八方より積込ませ、漕入こぎいれさせ、納屋にも池にも貯たくわえること、乱杭逆茂木らんぐいさかもぎを打つたるごとく、要害堅固いしずえに礎いしずえを立てた一城あるじの主人といつても可いい、深川木場の材木問屋、勝山重助の一粒種。汗のある手は当てない

秘蔵で、芽の出づる頃より、ふた葉の頃より、枝を撓めず、振は直さず、我儘わがままをさして甘やかした、千代田の巽たつみに生抜きはえぬの氣象もの。

随分派手を尽したのであるから、以前に較べてこの頃の不如意に、したくても出来ない師家への義理、紫の風呂敷包の中には、ただ清書と詠草の綴じたのが入っているばかりの仕誼しぎ、わけを知ってるだけに、ひがみもあれば気が怯ひけるのに、目の前に異彩を放つ山河内の姫が馬車に積んで来た一件物、お夏はまた一倍肩身が狭くなるのであった。

されば気の挫くじけた声も弱く、

(お暑うございます、)と手をついて挨拶して、ものもいってく

れぬ師匠夫婦が気色のほどを伺うと、螢の崇りがあるのでもないから、因縁事でもあるまいけれども、才子はその時も手にしていた深草形の団扇を膝の真中あたりで、じつと凝視めて黙っていたが、顔を上げると、何と思つたか、半白という上目づかいに、お夏の面をじろりと見て、

（ああ、暑うございますこと、勝山さんあなたお客様を煽いで下さい、私はちよいとあちらへ参りますから、）と畳へ団扇をさらして、お夏の身近う突いて寄越し、（失礼を、）と姫にいつて、そのままふいと座を立つた。

お夏は聞正すまでもなく、疑うまでもない、明かに、ちやうど自分が居る背後から煽ぎ参らせよ、といわれたのである。

それ、頼まるれば越後から米搗こめつきにさえ出て来る位、分けて師うちぎみの内室おほが仰せであるのに、お夏は顔の色を変えてためらった。

(そうだ、勝山さん煽いでお上げ、)とお夏ただちが直に命を奉ぜぬのを、歌詠うたよみの大人は寛仁大度、柔かに教えるがごとく仰せられる。それでも黙って俯向うつむいていた。

鴨川はまた優しい声して、

(分りませんか、あのね、今才がそういつたのはね、あちらに用があつて行くゆから、あなた、そこにありますその団扇で、お客様を煽いで下さいと言ったんです。)

(はい。)

(分りませんか、あのね、今才がそういつたのはね、あちらに用

があつて行くから、あなた、そこにありますその団扇で、)

お夏は堪らず団扇を持って、姫が羅の袂を煽いだのであつた。

十七

「先生、惜いことをしました、同一杯回生剤を頂かして下さいのなら、先方へ参りません前に、こようやつて、」

と麦酒の硝子杯を一呼吸に引いて、威勢よく卓子の上に置いた、愛吉は汚れた浴衣の腕まくりで、遠山金之助と、広小路の麦酒ホールの一方を領している。

「五六杯引掛けておきや、半分は酒が手伝つて暴れてくれます、

何しろしらふなんで、」といいかけて、迫った眉根を寄せたのである。

金之助は腰をかけたまま、両手で椅子をおさ圧えて卓子に胸をくつつ附着けて、

「大向うが喝采やんやでない迄も謹んで演劇しばいをする分にやあ仕損ないが少ないさ、酔っぱらって出懸けてみなさい、他の酔ほかっぱらいと酔っぱらいが違うんだよ。愛吉さん、お前が酒と連立ったんじや、のつけ向うから鴨川で対手あいてになつてくれやしない、序幕に出した強談場ゆすりばだし、若干金なにかしかこつちから持込というのだから、役不足だったろう、まあ飲むが可いい、」と笑っている。

「どういたしまして相済みません、私わつしあね、先生、書生や車夫くるやま

なんぞが居るてますから、つかみだ 掴出す位なことはするだろうと思つてね、そうしたら一番はりたお 撲倒しておいて、そいつをしお 機に消えようと思つたんだが、まるで足腰が立たねえんです。まだね先生、そりや可ようございますが、あいつら 彼奴等人をきちがい 狂人にしやあがつてさ、寄よつきやしませんでした、男たてごかしだの、立たてごかしだのは幾らもあるんだけれど、狂人ごかしは私あはじめてなんで、躍うるような手つきで引上げて参りましたがね、ええ、お羽織はお返し申します。
 ー

愛吉は胸紐を巻込んで、懐そてつに小さく畳んで持つて来た、来歴のあるかの五ツ紋を取出して、卓子の上なる蘇鉄そてつの鉢物の蔭に載せた、電燈の光はその葉を透すかして、涼しげに麦酒ビールの硝子杯コップに映るの

である。

「ですが先生、下司げすは下司で、この羽織を着た窮屈きつさツたらありませんでしたわっしぜ、私わっしあ思いますが、この上に袴はかまでも穿はいた日にや、たつて獄舎ごくやの苦みでさ。」

「それでもよくお前まへごまかしたな。」

「先方さきじやあ思おももつかかなかつたからでしょう、あのお夏なつさんに、こんな友達ともだちがあると思つた日にや、狒ひひ々に人間にんげんの情いろ婦むが出来るとあきらめなけりやなりません、へい、希代きだいなもんです。」とまた煽あおる。

「沢山たんおあがり、どうだね。」

「済みません、どうも五千足御散財ごさんざいをかけました上に御羽織ごうゐを拝

借、その上御馳走ごちそうでございます。ほんとうに先生は、金主と作者と、衣裳方いしやうかたと、振つけと、御見物とかねて下さるんだ、本雨の立廻りか、せめてのことに疵きずでもつけるんでなくつちやあ御鼻ごひいき眞効ががねえんですが、山が小せえんだね、愛宕あたごの石段を上るほどもないんですからね、」

「だって、ちよいとでも煽がせて来たら可いだろう、仕返しはそれだけで十分さ、私も勝山というその婦おんなの様子を聞いてさぞ心外だったろうと思つたから。一体風おいてのよくない御公家おくげでな、しみつたれに取りたがる評判の対手あいてだから、ついお前の話に乗つてお茶番を仕組んで上げたようなものの、これが道理から言つて見なさい、師匠と親は無理な者と思えと、世間じゃあいうんだよ。弟子

にお客を煽がした位、手近な物を取つてくれも同然さ。癩しやくに障つたの、口惜くやしいのと、怪しからん心得違いだと、かえつてお前さん達の方を言い落さなけりやならない訳だよ。」

「へい、大きおッにさようでございます。」と愛吉の神妙さ。

十八

「はははは、真面目まじめになるな、真面目になるな、ぐツとまた一杯ひとつ景気をつけて、さあ、此方方こなたかた楽屋内うちとなつて考えると面白い、馬鹿に氣に入つた、痛快痛快ということだ。」

金之助は色氣のない癢おくびをし、垢あかぬ抜けのした目のふちに色を染め、

呼吸いきをフツと向うへ吹いて、両手で額を支えたが、

「可いい、可いい、ああ溜りゆう飲いんの下る話だ、五千足の顔を見りや、

知事公の令嬢で歌所の奥方が、床屋の役やく介かい者もの——まあそうして

おけよ——役介者を煽あおごうという当世に、お世辞をいって紅白の

縮ちりめん緬めんでも拝領しようという気はなしに、師匠が華族様を煽あおがせ

たといつて、やけに腹を立てた柳屋のも難ありがた有い。人ひと事ごととは思わ

ないで、それをまた親の敵ほどに癩しやくに障さらしたお前も私あ嬉しい。

理窟はなしにとぼけていて飛んだ可いいが、いや、大人気もなくそ

の尻馬に乗って、利のつく金を若なにかし干かと痛いたんだ、この遠山先生も

悪くはあるまい、」と金之助は独りで莞爾にこにこ々々。

「話せらあ、話せらあ、こいつあ話せらあ。無暗むやみに飲のめます。」

と愛吉はがぶりがぶり、狼と熊とが親類になつたような有様で。

「理窟はないとおつしやいますかね、先生、時と場合と代物しろものに

因るんですよ。何も口の端はたをつねをつかられるばかりが口惜くやしいというんじ

やアありません、時に因りますとね、蚊が一疋留まつたのがまむし蚊に

食われたより辛うございます。私わつしあね、親孝行な奴が感心だとい

うんじやあねえんで、へい、不孝な奴でも豪えらいといひます。へい、

盗どろぼう人だつて気に入るのがあるし、施ほどこしをする奴に撲倒はりたおしてやり

たいのがありますね。不動様は鼻ひいき鼻ひいきですが、念仏は大嫌だいきらい。水

ごりを取つてそれが主人のためなんだと聞いたつて、びくともし

やあしねえんで、お三どんがひび轆ひびを切らしたつてそれが不便ふびんという

んじやありません、そんなのははじめツからその気でつき合つて

いるんですからね、甘いことをいうと附上りまき、癖になりますからね、にえず 酢をぶツかけときやあ可いんです、べらぼうめ、ヘツ、
 「しつか といつて、顔を顰め、

「無法なことをいうと吃しゃっくり 逆を出させるぞ。ヘツ、不可いけねえ、ヘツ、いやどうしやがった、ヘツ、何のこツたい、ヘツ驚きましたな。先生、そ、それですがお夏さんの団扇じゃあ恐きもしく胆にがえしました、理窟はねえんです、いえ、理窟がねえんじやあございませんや、けれどもその理窟は分りません。ヘツ、おい後生だ、ヘツ、何のこツた。」

愛吉はぐツたりと首こうべを低たれて、ふらりとしていたが、

「お待ち下さい、待つておくんなさいまし。ええと、先生、こう

です。何だつてその、あの毛唐人奴等けとうじんめ、勝山のお嬢さん、今じや
 あ柳屋の姉さんだ、それでも柳橋よしちよう葭町あたりで、今の田圃たんぼの
 源之助きのくにやだの、前の田之助ぜんに肖にているのさえ、何の不足があるか、
 お夏さんが通るのを見ると、大騒動おおさわぎをやりますぜ。柳屋のお夏
 さんとはいわないで、お夏さんの柳屋、お夏さんの柳屋ツて、花
 がるたを買いに来まさ。何だ畜生、上野の下あたりに潜ひそつてやあ
 がつて、歌読うたよみも凄まじい、糸瓜へちまとも思うんじやあねえ。茄子なすを食
 ってるきりざりす 蟋せき 蟀せき 野郎の癖に、百文なみに扱あいやあがつて、お姫様
 を煽あおげ、べらぼうめ。あの、先生、ここなんですがね、理窟わかしは私
 あ分わつてます、お夏さんは、うまれつき団扇あふツてものは人を煽あおぐ
 ものだツてことはかいきし知しつちやあいないんです。「

「うむ、まず。」

十九

愛吉は思わずまた吃逆しゃっくりをして、

「へッ、いや怨敵退散おんてき。真面目な所へ吃逆なざけは情ない。そうじや

あございませんか、深川の家に居なすつた時なんざ、団扇を持つて、自分を煽いだ事だつて滅多には無かつたでしょう。私あ上りまして見ましたがね、お夏さんが行水を使つて、立膝でこう浴衣の袖で襟を拭ふいてると、女中がね、背後うしろで団扇車うちわぐるまつてやつをくるくるとやつてました、洗髪あらいがみだし、色は白し、」

と酔眼を睜みはつて苦い顔で、

「庭の植木からは雫しずくが溢こぼれます、袂たもとだの、裾すそだの、その風でそよそよして、ぞつとするような美しさ、ほんとうに深川中の涼しいのを一人で引受けていなさるようで、見る者も悪汗ひっこが引込んだんです。

幾ら相場が狂ったつて、日本橋から馬車に乗つて、上野を歩てくで、道端の井戸で身体からだを洗つて、蟋蟀きりぎりすの巢へえへ入つてさ、山出しにけんつくを喰つて、不景気な。この温気うんきに何と、薄いものにしろ襦じゆば袷あまつちよと合して三枚も襲かさねている、茄うだった阿魔女あまつちよを煽あほがせられようとは思やしません、私はじめ夢ようの様ようでさ、胸気むねきじゃありませんか。」

「可いや、まあそんなに怒るな、傍はたに居る者が怯びく気々々する。」

「御免なさいまし。つい、」と云って愛吉は苦笑した。

金之助はやや更あらたまり、

「何しろ以前は大した栄耀えようをしたものらしい。」と自ら語り頷うなずいて且つ愛吉の面おもてを見た。

「じゃあお前は先せんからの知ちかづき己か、紋床に居て近所だから絵草紙屋と懇意になつたというんじやあないのかね。」

関係のいかんを怪あやしんでそれとはなく尋ねたのが、愛吉に直ぐ読めて、

「おかしゆうございましょう、先生、檜舞台の立女形たておやまと私等わつしらみたような涼み芝居の三下が知ちかづき己すさまツてのも凄じいんですが、失礼

御免で、まあ横ずわりにもなつて、口を利くには仔細しさいがなく
ツちやあなりませんとも。」

「成程、ありそうな仔細だよ。まず飲んで、ふむ。」

「過年いつか、水天宮様の縁日の晩でしたっけ、大通おおどおりのごツた返す

処をちつとばかり横町へ遠のいて明治座へ行ゆこうという麵麩屋パンやの

物置の前に、常店じょうみせで今でも出ていまさ、盲目めくらの女の三味線を

弾くのがあります。投銭にはちやちやらかちやんなんて古風な流は

行唄やりうたをやつてますが、可い声いで、ぞつとするような明あけ鳥がらすを

やりますんでね。私わつしあ例のへべれけで、素見数ひやかしの子か何か、鼻

唄で、銭のねえふてくされ。おう、勤つとめする身のままならぬテツテ

チチンテツテチチンリンリンぬしⅡⅡいつぞや主ぬしの居続いつづけに寝衣ねまきのま

まに引寄せてⅡⅡを聞かしねえ、後生だ。こうお客にすりや御損が行く、情人にして不足のねえからつけつ曾我の十郎てえお兄いさんだ、頼むぜ、と取巻いた人立を割って怒鳴り込んだんでき。ひよろひよろしながら先生、「といって、愛吉は椅子に懸りながら身悶をして見せた、金之助はやけに頤を撫でて、

「悪くない、うむ、そうすると、」

「いつも交返すんだから盲目め、声を知つてまさ、かねてお気にやあ入らなかつたと見えて、

（ああ、弾くがね、お鳥目をおくれ。）

（何を！）

（私の新内はばら銭じゃあ聞かせないんだよ。）ツて言いました

ぜ、先生、御存じじやありませんか、年増で縁日を稼ぐ癖に、好
い女でさ。」

二十

ここに愛吉が金之助に話したことは、ちようど二年前、一昨年
の晩春の事で。

愛吉は今に到ってもおとなしくない、その時分もおとなしくな
かったが、恐らくいつまでもおとなしくないのであろう。

いうがごとく、縁日稼の門附も利かない気で、へべれけの愛
吉が意にさからい、^{あた}俵を払わなければ術は見せぬ、お^{あし}銭がなくつ

ていて、それでたつて凄^{すこ}い処^{ところ}を聞きたいなら、前^{まへ}に立つて提^{ちようち}灯^んは持たずとも、月夜^{うしろ}に背後^{うしろ}からついて来て、お花主^{とくい}の門^{かど}でやる処^{ところ}を、こぼれ聞^ききに聞いたら可^よいと、愛^{あい}嬌^{きよう}の無いことを謂^いつたそう^な。

二振^{ふり}の斧^{おの}と、一挺^{ちよう}の剃^{かみ}刀^{そり}、得物^{とくぶつ}こそ違^{ちが}え、氣象^{きさう}は同一^{どうい}、黒旋^{くろせん}風紋^{ふうもん}床^{とこ}の愛吉^{あいきち}。酒^{さけ}は過^{あや}している、懐^{なつか}にはふてている。殊^{こと}に人立^{ひとたち}の中^{なか}のこと、凹^{へこ}まされた面^{つら}は握^{にぎり}拳^{こぶし}へ凸^なになつて頭^{あたま}われ、支^たうる者を三方^{さんぱう}へ振飛^{ふり}ばして、正面^{しょうめん}から門附^{かどづき}の胸^{むね}を掴^{つか}んだ。紋床^{もんど}の若いのが酔^よつたといえ^ば、交番^{かうばん}でも棄^すてて置^おくは、店^{みせ}の邪魔^{じゃま}はせず、往來^{ゆきき}には突懸^{つつかか}らず、ひよろついた揚句^{やうぐ}が大道^{だうだう}へ筋違^{すじかい}に寝^ねて、捨鐘^{すてかね}を打^うてば起^おきて行^いくまで、^{あたりさわ}障^{さわ}りはないからであつたに、

その夜は何と間違つたか、門附の天窓は束髪のまま碎けて取れよう、啊呀と傍の者。

(あれ！)

(畜生さあ、鳴かねえ驚なら絞殺して附焼だ。)と愛吉はちらつ
く眼、二三度撲りはずして、独で蹠跟げざまにまた揮上げた。

握拳をしつかり掴んで、力任せに後へ引放した者がある。

(顔を見ろ、)

(や、)

(蒼くなれ蒼くなれ、奴、居酒屋のしたみを舐めやあがつて何だ

その赤い顔は贅沢だ、我が注連縄を張つた町内、汝のような
子子は湧かない筈だ、どこの流尻から紛れ込みやあがつた

。と頭ごかし、前後に同一おなじのような、あわせ、三尺帯の若衆わかいしゅは大勢居たが、大將軍のような顔かおつき色で叱つたのは、なまず、鯨の伝六といつて、ぬらくらの親方株、月々の三十一日みそかには昼間から寄席よせを仕切つて、そうざらい、総温習を催す、素人義太夫の切前きりまえを語ろうという漢おことであつた。いつぞや、過日さらいその温習の時、諸事周旋顔に伝六木戸へ大胡坐おおあぐらを搔込んでいて、通りかかつた紋床を、おう、と呼留め、つい忙しくつて身が抜けねえ、切前にやあ高座へ上るのだから、ちよいと道具を持つて来て髯ひげだけあたつてくんなよ、と言い種いが横柄いな上、かねて売れた構がまえの顔色を癩かに障らしていた、いなり、稻荷いさんの紋三もんざ、人を馬鹿にすんな、内に昼寝をしてる処へ、意休が髯ひげを持込んだつて、氣に向かなけりやお断り申すんだぜ、はッか、憚はんながらこの稻荷はな、

寄席へ出開帳でがいちようはしねえんだ、あばよ、一昨日おととい来い、とフイと通過ぎたことがあるから、坊主が憎けりや袈裟けさまでの筆法で、同一おなじ内の愛吉にも含んだ意味があるらしかった。

（放せ、やい、愛の手ツ首は細いつてよ、女の子が加減をして握るぜえ、この鯰なますめ。）といきなり取られた手を振切つて、愛吉は下駄を脱いで飛とび菟かかつた、勢いきおいに恐れて伝六はたじたと退さがつたが、附ついていた若い衆しゆがむらむらと押取りおつと包んで、胴上げにして放り出した。

愛吉は足も立たず、腰も立たず、のめつているのを、いや、踏むやら、蹴つるやら。これを笑いずてに尻をまくつた鯰の伝六を真ま先つさきに、若わか者いものの立去つたあとで、口惜くやしい！ とばかりぶるぶ

ると顫ふるえて突立つたったが、愛吉は血だらけになつていたのである。

二十一

築地明石町あかしちように山の井光起みつおきといつて、府下第一流の国手があ
る、年とし紀はまだ壮わかいけれども、医科大学の業を卒おえると、直すぐ一
年志願兵に出て軍隊附になつた、その経験のある上に、第二病院
の外科の医員で、且つ自宅でも診察に応じている。

口くちすくな寡くちすくなで、深切で、さらりと物に拘かかわらず、それで柔和で、品
が打上り、と見ると貴公子の風采あり、疾やまい病やまいに心細い患者はそれ
だけでも懐しいのに、謂うがごとき人品。それに信州、能登、越

後などから修業に出て来て、なまりだくさん 訛沢山で、お舌をなどという風ではない。光起の亡き父も、義庵と称して聞えたてんやくのかみ 典薬頭、今も残っている門内左手ゆんでの方の柳の下なる、この辺あたりに珍しい掘井戸の水は自然の神薬、大概の病はこれを汲めばと謂い伝えて、折々は竹筒、瓶、徳利を持参で集るほどで。

先代の信用に当若先生の評判、午後ひるからは病院に通勤する朝の内だけは、内科と外科としかるべき助手を兩名使つて、なお詰めかける患者を引受け切れず、外神田に地を選んで、住所の町名をそのまま、明石病院あかしというのを私立で当時建築中、ここで山の手いきおいの病家を喰留めようという勢。

山の井の家には薬局、受附など真まっしろ白な筒袖の上衣まとを絡つて、

肅々と神の使であるがごとく立働くのが七人居て、車夫が一人、女中が三人。但しまだ独身であるから、女は居ても何となく書生が寄合つたという遣やりっぱな放なしな処があつて、悪く片附かない構かまえの、秘かくさず明らさまなのが一際奥床しい。

記者遠山金之助は、愛吉からこの山の井の名を聞くと、一層、聞く話に身が入つた、蓋けだしかねて自分は医学士と別懇であつたせいである。

さるほどに愛吉は鯨なますの伝六一輩に突転ばされて、身体五六ヶ所に擦すりきず疵、打たれ疵など、殊に斬られも破られもしないが、背中の疼痛いたみが容易でない。

もつとも怪我をした当夜は、足を引摺ひきずるようにして密そつと紋床へ

這戻り、お懶惰なまけさんの親方が、内を明けて居ないのを勿怪もつけさいわいの幸、お婆さんは就寝およつてなり、姐あねさんは優しいから、いたわつてくれたししようちゆう、焼酎なすを塗なすつて、上あがりくち口の火鉢わきの傍つつぶへ突臥つつぶして寝たが、さあ、難儀。

あくる日帰つて来た紋三郎には口惜くやしくつても喧嘩けんかのことは話さず、もとより条理すじみちの立つた事ではない、酒の上の悪戯いたずらを懲こららした方は、男が可いけれども、親方は身内のこと、邪が非でもきかない気なり、かねて快からぬ対手あいてが伝六と明してはただ済むまい。引被ひつかぶつて達引たてひきでも、もしした日には、荒いことに身顛みぶるいをする姐さんに申訳のない仕誼しぎだと、向後きようご謹みます、相替からず酔つたための怪我にして、ひたすら恐入るばかり。

転んだ身体を引摺つて歩行^あいても、これほど疵がつく砂利は界^か
 隈^いにない筈^{はず}と、紋三内々は睨^{にら}んだが、愛的可いほどにしておけ、
 お前^{めえ}には母親^{おふくろ}があるぜ、と言つて深くは咎^{とが}めず、大目に見てく
 れたのが附目な位。可哀そうに染むだらうねと、あねさんがまた
 塗^ぬつてくれる焼酎を、どうぞ口の方へとも何ともいわない弱りさ
 加減、黒旋風の愛^{いた}吉疼^{いた}むこと一方ならず。

素人療治では覚^{おぼ}束^{つか}なくなると、あたかも可^よ紋床は、かねて山
 の井に縁故があつた。

先^{せん}の義庵先生は、市に大隠を極^きめて浜町^{すま}に住つたので、若い奴^や
 等^{つら}などと言つて紋床へ割込んで、夕方から集る職人仕事師輩^{であい}を凹
 ますのを面白がつて、至極の鉄拐^{てつか}、殊の外稲荷が鼻^{ひい}屑^きであつたの

で、若先生の髪も紋床が承る。

二十二

(どうです豪傑、蝦蟇がまあぶらの膏あぶらじゃあ不可いけませんか。)と薬局に痛めつけられて、いつも蝦蟇の膏と酒さえありや外科も内科も訳なしだ、お前さん方は弱い者いじ苛いじめで儲もうけるんだ、などと大言を発する愛吉、中指のさきで耳の上を搔かきながら大おお悄おしげになってその日もまた。

明石町へ通うこと五日六日、もう佳よかろうという日のことであつた。

打傾いたり、首垂れたり、溜息をしたり、咳いたり、堅炭を埋けた大火鉢に崩折れて凭れたり、そうかと思うと欠伸をする、老若の患者、薬取がひしと詰懸けている玄関を、へい、御免ねえ、で愛吉はつかつかと。

かかる馴染でお出入といったような怪我人であるから、番号も遠慮もない、愛吉は四辺構わず、

(おう、柴田さん、この、診察所、と黒塗の板に胡粉で書いてある、この札をどうかしておくんなさいな。横ツちよに曲つて懸つてるんですが、私あ過日中から気になつてならないんで、直すかと思つてるとやっぱ横ツちよだ。私の内は貧乏だけれど姉さんが居るから暖簾が汚れませんや、御新造が居なさらねえと

それだもの困つちまう、と高慢なことをいいながら、背伸をし
て、西洋造の扉の上に、鶏卵色たまごいろの壁にかかった塗板まっすぐを真直に
懸直し、そのまま閉つてる扉を開けて、小腰かがを屈めて診察所へ入
つた。

密閉した暗室の前に椅子が五脚ばかり並んで、それへ掛けたの
が一人、男が一人、向うの寝台ねだいの上に胸を開けて仰向けになつて
いる。若先生光起は、結城ゆうきの袷あわせに博多はかたの帯、黒八丈の襟かきを襲かねて
少し袴ゆきみじか短ひに着た、上には糸織あいみじん藍微塵ひらうちの羽織平打むなひもの胸紐、
上靴ひっかは引掛け、これに靴足袋はを穿はいているのは、蓋けだし宅診が済む
と直ちに洋服テエブルに變つて、手車で病院へ駆けつけようという早手廻。
卓わき子を傍かかに椅子ひとりに倚かかつて、一個の貴夫人さしむかと対向むかいで居た。

卓子に相對して、藥局の硝子窓がらすまどを背後うしろに、かの白の上服うわぎを着たのと、いま一人洋服を着けた少年と、処方帳をずばと左右に繰広げ、筆ペンに墨汁インキを含ませつつ控えたり。

藥かおりの薰は床に染み、窓を圧して、謂うべからざる冷靜の趣。神社仏閣の堂と名医の室は、いかなる者にも神聖に感じられて、さすがの愛吉、ここへ入ると天窓あたまが上らず、青菜に塩。愛吉、藥の匂においにお返し返つて医学士に目礼したが、一体八字鬚ひげのある近眼鏡を懸けた外科の助手に毎日世話になるのであつたから、愛吉は猶予ためらわず、ひよこひよここと進むと、戸が半開はんびらきになつていたので、突いきなり然つっこ外科室へ首を突込つっここんだが、驚いて退すさつた。

咄嗟とつさの間、世にも媚なまめかしい雪のような女の顔を見たのであつた、

そうして愛吉がお夏を見たのは、それが最初はじめだといふのである。
 見るから心も冷ゆるばかり、冷たそうな、艶つやのある護謄布ゴムぬのを蔽おお
 いかけた、小高い、およそ人の脊丈ばかりな手術台の上に、腰に
 絡まとつた紅くれないの溢こぼるるばかり両の膚を脱いだ後姿は、レエスの窓掛を
 透すかす日光ひかりに、くつきりと、しかも霞の中に描かれたもののように目
 に留まつた。

愛吉の間の悪さ、思わず顔を赧あからめながら、もじもじ後あと退じさり
 になり、腰をかけて待合している、患者か、はた供のものか、円ま
 鬚るまげの婦人おんなの次なる椅子に堅くなつたが、心こそ着かざりけれ、
 外科室に寄つた椅子の上に、これもまた媚かしく差置いてあるの
 は、羽織と、帯と、解棄てた下ふし《したじめ》と懐紙ころがみ。取乱

した藤お納戸、緋、桃色、水色、白、紅。

二十三

愛吉はきよとんとして、ぼんやりあらぬ方を眺めながら、目玉をくるくると遣つて、やがて外科室のその半開の扉をおした、洋服の手が引込む、と入違いに、長襦袢の胸がちらちら、薄紫の半襟、胸白く、袷の衣紋の乱れたまま、前褌を取つたがしどけなく裾を引いて、白足袋の爪先、はらりと溢るる留南木の薫。

診察室を出て来たが、深川の勝山、まだ世盛の頃で、お夏そ

の時は高島田の、年紀十七であつた。

（何某。なにがし）とかの筆ペンを持った一人が声を懸けると寝台の上に仰あ向けになつていたのは、おむ、いりかわ、すべ、よろよろ、よろよろと外科室へ入交る。

同時に医学士に診察を受けていた貴夫人は胸を搔合せたが、金縁の眼鏡をかけた顔で、背後うしろへ芍しゃくやく薬やくが咲いたような微妙いみじいけ勢はいに振返つた。

その時、打合せの帯を両手に取つて、床に膝をつきついてお夏の前に廻つたのは、先刻さつきから控えていたかの円鬚おんなの婦人であつた。

お夏は衤おくみを取つて揃えようと、腰から乳の下に下メを無造作にぐるぐる巻、あてがつてくれる帯をして、袖を上へ投げて肩にかけ

た。附添の婦人は衝と立つて背後へ廻る。

愛吉は心なく垣間見た人に顔を見らるるよう、思いなしか、附添の婦人の胸にも物ありげに取られるので、うつむいては天窓を搔いた。

その帯をまだ結び果てなかつたほどのことで、光起は今貴夫人を診察し了して、立身になり、片手を卓子につきながら、低声で何か命じて、学生にその筆を運ばしめていたが、ちよつと筆を留めて伺つた顔に頷いて見せて、光起は衝と立直つた時、ふと、帯をしているお夏を見て、

(済みましたか。)

(ええ、)と頷く。

(痛かったでしよう。)

(はあ、)と事もなげに、淡泊に答えたのである。

光起は微笑ほほえんで、

(あなた おつかさん
貴女、母様のいうことを肯きかないとまたできますよ。)

お夏は襟を叩くわえるようにして、差俯さしうつむ向いて、颯さつと顔を赧あからめたが、何にもいわないで莞爾にっこりした。

愛吉は額を撫なでた。

医学士の言葉とお夏の素振そぶりを、附添は嬉しそうに、

(お夏様、あれ御挨拶をなさいましたな。)

(知らない、)と素気そっけないことをいつて再び莞爾にっこり。

(先生、癬たむしの治ります薬はありませんでしょうか。)と不意に言

い出したのは件の貴夫人であった。

(打棄うちぢやつておおきなさい、)と光起は言下に応ずる。

(でもあのこんなですから、)とさきも世馴れた、人懐ひとなつこいと

いったような調子で、光起に背を捻せな向ねじむけると、頸うなじを伸して黒縮くろぢり

緬めんの羽織の裏、紅くれなゐなるを片落しに背筋せなの斜ななめに見ゆるまで、抜衣ぬきえも

紋もんに辻すべらかした、肌の色の蒼白あおしろいのが、殊まづに干からびて、眉

を造った、白粉おしろいの濃い、金縁まぶたの眼鏡しわに瞼まぶたの皺しわをかくした顔こそ

若わけれ、あらわに見ゆる筋骨すじぼねは数四十であるのに、彼いを抱いだくも

のあらば正ただにその者の手の下なるべき、左そびらの背を肩へかけて、亜ア

弗利加フリカの地図のごとき一面の癩かさ、あな笑止あなわらや。

「汚きたえな! っねて私わつしあ本ほん当とうにううつかり。それが何なにです、山やま河こう内うち

という華族の奥方だったんですって、華族だって汚えんですもの。
 「と愛吉はビイヤホールで語りながら、今も思出すほどか眉を
 聳ひそめたのである。

二十四

名は知らず、西洋種の見事な草花を真まっしろ白な大鉢に植えて飾つ
 た蔭から遠くその半ばが見える、円まるがた形の卓テエブル子を囲んで、同おなじ
 くろいでたち黒扮装で洋刀サアベルの輝く年としわか少すくな士官の群ひとむれが飲んでいた。
 此方こなたに、千筋の単ひとえもの衣お小倉の帯、紺足袋を穿はいた禿はげ頭あたまの
 異様な小男がただ一人、大硝子杯五ツ六ツ前に並べて落着払った

姿。

時々髻ひげのない顔が集り合つては、哄どっという笑語の声がかの士官の群から起るごとに、件くだんの小男はちよいちよい額を上げて其方そなたを見返るのであるが、ちようど背せなかあわ合せになつてゐるから、金之助にこれは見えなかつた。

ビイヤホールの客は、今わずかに三組の外には無かつたので、生麦酒なまビールの出入だしいれをする一段高い台の上には、器械を胸あたりの辺にして受持のボオイがあたかも議長席に着いたもののように正面を切つて身動みうごきもせず悠然と控えている、その下に椅子に凭かかつて一人のボオイは新聞を読む、これと並んで肩から脇の下へ金かねぶくろ袋かぶをぶらさげた一人、白の洋服の足を膝の処で組違えて、斜ななめに肱ひじで身体からだ

の中心を支えて立身で居る、しばしば^{あしおと}蹠音を立ててしつくい^{たたき}叩
 の土間を、靴で士官の群の処へ通うのはこのボオイで、天井は高
 く^{あたり}四辺はひっそり、電燈ばかり煌々^{こうこう}と真昼間のごとく卓子を
 照^{てら}して、椅子には人影もなかつたのである。

戸外は立迷う人の足、往来も何となく騒がしく、そよとの風も

渡らぬのに、街頭に満ちた露^{ほしみせ}店の灯は、おりおり下さまに靡い^{なび}

て、すわや消えんとしては燃え出づる、その都度夜商人は愁わ^{うれ}

しげなる眉を仰向けに打見遣る、^{あおむ}大空は雲低く、あたかも漆で固

めたよう。

蒼と赤と^{ふたいろ}二色の鉄道馬車の灯は、流るる^{ほたる}蛍かとはばかり、暗夜

を貫いて東西より、衝と寄つては颯と分れ、且つ消え、且つ^{あらわ}顕れ、

輾れきろく輾ちかづとして近き来り、殷いんいん々として遠ざかる、響ひびきの中に車夫の
 懸声、蒸気の笛、ほとんど名状すべからざる、都門一場の光景は
 一重ひとえの硝子がらすに隔てられてビイヤホールの内は物色沈々、さすがに
 何となく穏おだやかならぬ宇宙の氣勢けはいの、屋おくを圧して刻々に迫るを覚ゆ
 る、これが、風になるか、雨になるか、日和癖ひよりぐせで星になるか、
 いずれとも極きまつたら、瀬を造つて客は一斉に籠こむのであろう。

とばかりにしてもものの静けさよ。ここかしこの鉢植なる熱帯地
 方の植物は、奇花を着け、異香を放ち、且つ緑りよくすい翠を滴らせて、
 個ひとりひとり々電燈の光を受け、一目眇びようとして、人少なに、三組の客も、
 三人のボオイも、正にこれ沙漠の中なる月の樹蔭こかげに憩える風情。

この間に、愛吉がお夏の来歴を説く一場の物語は、人交ひとまぜもせ

ず進んで、築地明石町の医学士の診察所における出来事にまで至つたのである。

「声を出して言つたのか、汚えなんて、癬たむしを嘗なめさせられはしま
いし、肌を脱いで医者に見せた処うしろを背後から、汚え、なんていう
奴がありますかい、しかも華族だつてな、山河内……伯爵だ。

もつともその奥おく様は赤十字だの、教育会、慈善事業、音楽会
などいうものに取合つて、運動をするのに辻車で押廻すという名な
代だいのかわりものなただけれども、怒つたろう、皆みんな驚いたろう、乱
暴狼藉ろうぜきだ、どうした、それから、」

「私わつしもついうつかり遣つちやつたんで、はつと思つと、」

「うむ、」

「ちようど代診さんの方へ呼ばれたから遁げ込みました。」

二十五

「しかし癬たむしきが汚きたえといつたのが、柳屋の氣に入つたというでもなかろう。」

愛は真面目に、

「へい、そういう訳でもないんですがね。」

「それじゃあ手術台に肌脱はだぬの、俗にそれあられもないという処を見られたのが御縁ご縁になったか、但しちつとどうもおかしいな。」

「何、そういうわけでもないんですがね。」

「何しろ、おまえ汝の方からゆすり込んだものと私は思うな。」

「先生御串戯ごじようだんを、勿論あれです、お夏さんは華族てえとだいきら大

嫌いです。わっし私が心も同一おんなじだ、癬は汚えに違います、ですが、そ

れがどうということはありませんよ。それからね、素肌を気にし

て腋わきの下をすぼめるような筋のゆるんでる娘ねえさんじゃありません

んや。けれども私が出入ではいりをするようになったのは、こちらから泣

附いたんです、へい。」

「手を合せて、拝みます、と口説くどいたか。」

「どういたし、……手前御慮外は申しません、泣ついたのは母おふく

親ろでさ。」

「ははあ、紋三郎がいったように、いつも酒ひだりの方の意見の義だろ

う。」

「いいえ、その時は生命いのちにかかわります一件。」

「おや、お前それでも酒の他ほかにかかわることがあるだろうか。」

「大有り、」といって愛吉は硝子杯コップの縁をおさえながら、金之助を

じつと見て、

「串じょうだん戯ごじゃアありませんでしたよ、まったく。」

それがね、やつぱりその日なんです、事というと妙なもんで、

何でもない時は東京中押廻おんぼしたって、蜻蜒とんぼ一足ぶつかりこはねえ

んですが、幕があくと「いっとき齊せいでさ。」

「大層感じたな。」

「まったくですから。」

「じゃあ何か、華族様へ御無礼を申したとあつて、お差紙でも着いたのかい。」

「いえ、先刻さつきも申しました通り、外科室の方へ呼ばれたんで、まずお座は濁りましたね。

それからお手当が済みました、もう通つて来ないでも大丈夫だ、あとはただ大人しくなさいよ、さ、大人しくしろが可ようございましょう。

無暗むやみとお礼を謂いつて匆々そこそこに山の井さんの前を抜けて、玄関へ参りますとね、入る時にやあ気がつきませんでした、ここにそのまた珍事しゅつたい出来しゅつたいの卵が居たんです。女の子で、「
「いずれそうだろう。」と金之助は故わざとらしく深く領うなずく。

「まあ、お聞きなさいまし。上あがり口の突とつ尖さきの処ところ、隅すみの方に、ばさばさした銀杏返いちようがえし、前髪まへかみが膝ひざに押おつくように俯うつむ向むいて、畳たたみに手てをついてこう、横よこずわりになつて、折ま曲まげている小さな足の踵かかとから甲かたへかけて、ぎりぎり繻ほう帯たいをしていました、綿わた銘めい仙せんの垢あかじみた袷あわせに、緋ひ勝がちな唐めりん縮す緬すと黒くろの打うち合あせの帯おび、こいつを後あ生か大事だいじにメ《し》めて、」

「大分くわ悉せつしいじゃないか。」

「私わつしだつて先生せんせい、唐めりん縮す緬すと繻しゆ子すぐらいは知しつてますぜ。」

「幾いく干くらか出でせ、こりや恐おそろしい。」

「真ま平つ御びら免らなさい、先さ方きは小こ児どもなんです。ごく内うち気きそうな、半ま

襟えりの新しいが目め立たつほど、しみツたれた哀あわれな服み装なり、高たか慢まんに櫛くしをさ

してるのがみじめでね、どう見ても女中なんですが。

恐ろしく疼いたむかして、小さく堅くなつて、しくしく泣いてるんです。

姉さんどうしたんだツてね、余り可哀相かわいそうだから声を懸けてやりましたが、返事をしません。疵きず処しよにばかり気を取られて、もう現うつなんだろうと思いましたが、少わかいのに疼いた々いたしい。」

二十六

「じれつたいから突いきなり然肩いに手を懸けると、その女中は苦しうつてか、袷とも透とおすような汗びっしより、ぶるぶる震えているんでし

よう。

どうしたんだって聞きますとね、足の裏から突通るほどの踏ふみぬ拔きをしたんだそうで、その前の日の事だっというんです。

見りや込合つていましたけれど、どれも病人、人の世話を焼こうという元氣の好い奴やつは居おりませんや、こいつかかり合だ、身体からだを抜くわけにやいかねえような氣になりました。

一体どこの者だ、家うちは遠いかつて聞きますとね、つい五町ばかり先でございます、あの、親分の処ところに、と弱った声でいいました。親方なますというのは鯨なますの伝——どうです騒さわぎの卵たまごじゃありませんか、尋た常事だごとじゃアありますまい。

何でも伝が内の奉公人に違えねえ。野郎め、親方々と間違で

も人に謂われる奴が、汝うぬが使つてる者がこんな怪我をしてるのに、
 医者よこに寄越すツて、ないら病やみの猫を押放おっぱなしたような工合は何た
 る処置あねだい、姉さんをつけて寄越さないまでも、腕車くるまというもの
 がないのじゃあなかるう、可哀相に丸ぼちやの色の白いのが、今
 の間にげっそり瘦やせて、目のふちを真蒼まつさおにしていらあ、震えて
 るぜ。

わっし そう思つて堪たまらなかつたんですが、気が着きますとね、待てよ、
 私わっしが思つた通とおを口へ出して謂やあ、突いきなり然伝いを向うへまわして、
 ずらりと並べる台辞せりふになる、さあ、おもしろい、素敵だ。

一番、この女こをかつぎ込んで、奴が平生おとこ侠客ぶるのを附目にし
 て、ぎゆうと謂わそう。

蝦蟇がまの膏あぶらで凹くぼまされるのも何のためだ、忘れやしねえ。」

と話をすするにも凄すさまじい意気いき込んだ、愛吉はちよいと気きをかえ、

「へへへへ、先せんの縁日えんじの晩ばんのは、全くこつちが悪わるかつたんでさ。落度らくどはあつたつて口惜くやしいにや口惜くやしいでしよう、先生せんせい、子こ曰いわはよして聞きいて下ください、可ようございますか。」

「可いいさ、可いいさ。」

「オイ、姉あねや、私わがが肩かたへつかまりねえ、わけなしだ。お前まへン処とこままで送おくつてやろうと、穿はき物ものを突懸つけておいて、蹲しゃがんで背中せちゆうを向むけますとね、そんな中なかでも極きまりのきまりわるそうに淋しみしい顔かほをして、うじうじ。

じれつてえ女こじやあねえか、尻なんざあ抱きやしねえや、帯を
 持つて脊負つてやら、さあ来い、と喧嘩づらの深切いいずくめ、言いぐ
 さが荒つぽうございますから、おどおどして、何と肩へ喰くいつく
 ように顔をかくして、白まつ昼びるま、それでもこの野郎の背中へ負おんぶを
 しましたぜ。あとで考えると気の毒きずでさ、女の気じやあ疵きずが痛いたむ
 方がどんなにお恰かつ好こうだか知れませんよ。

全く叱りつけるように勧めたんですからね、すすめ人てが私わたしでし
 よう。阿魔あまはてつきり、ぶんなぐられると思おもつて負おぶさつたもんで
 す、名はお米こめツていいいます、可愛い女こなんですがね、十七でし
 よ。

さあ、歩ある行き出すと、こう耳み朶みたぶの処ところへ纏もつれた髪かみの毛けが障さまたるで

しよう、あいつあ一筋でもうるそうがさ、首を振るとなお乱れて絡まといますから、呼吸いきをかけてふツふツ鬢びんの尖すみを向うへ吹いちやあ、みつかど三角の処まで参りますとね、背後うしろから腕車くるまが来ました。

町幅が狭いんですから、すれ違つて前へ駆け抜けたと思うと、振返つた若衆わかいしと一所に、腕車の上から見なすつたのは先刻さつきのお嬢様、ええ、お夏さん。」

二十七

「藤お納戸ゆばんの、あの脱いであつた羽織を被きておいでなすつた。襦じ袢ばんの袖口からに搦からんだ白い手で、母衣ほろの軸つかに搦つかまつて、背中を浮か

すようにして乗ってましたっけ、振向いて私わっしがお米おぶを負つてた形を見て莞爾にっこり笑いなすつた。

顔を見合せますとね、こつちでも何だか知ちかづき己おののような気がしたもんですから、遠慮しねえで、

(今日は、)と肚はらの中で言つてお辞儀したんです。

腕車は何、休んだんじやあごぎいません、駆けてる中うち、ちよいとの間まなんで、そのまま飛ぶように行つちまいましたが、縁縁でございましょう、先生。

世の中というものは、どこにどんな引ひっかかりがあるか知れませんぜ。なぜツてますと、あとで分りましたが、そのお夏さんの勝山うちという家は、私の亡なくなりました父ちやん爺んが、船頭ちやんで、奉公人同様

に久しい間御恩になったのでございました。

さあ、それから米坊をかつぎ込んで、ちようど縁端えんばなに大胡おおあく坐らをかいて毛抜をいじくつてやあがった、鯰の伝をふんづかまえて、思う状毒さまづいたとお思いなさいよ。

くだらないことをお耳に入れるでもありませんから、始末は申上げませんが、何なんしろ侠客おとこだとか何とかいわれる分では、お米に届かねえ点が十分にあつたんですから、こりや力ちからづく、腕うでづくじやあ不可いませんや、伝でんの親仁おやし大凹おぼみ。

こつちあぐツと溜りゆう飲いんが下つて、おさらばを極きめてフイとなつて、ぎつぷり朝湯を浴びた気さ、我ながら男振を上げて、や、どんなもんだい。

人形町居廻いまわりから築地辺、居酒屋、煮染屋にしめやの出入でいり、往復ゆきかえり、

風を払って伸のしましたわ、すると大變。

暗くわがりをを啣くわえ楊枝ようじ、月夜には懐手で、呑気のんきに歩行あるしていると、思

いがけねえ狂やまいぬ犬ぬめが嚙かみつ附つくような塩梅あんばいに、突いきなり然なり、突当つる奴

がある、引摺倒ひきずりたす奴がある、拳固こぶしでくらわす奴がある、一度々々

呼吸いきを引かないばツかりで、はツはツと思うことが、毎晩じやア

ありませんか。」

「成程、」

「その度たんびに微傷かすりきずです、一年三百六十五日、この工合じやあ三

百六十五日目に、三百六十五だけ傷がついて、この世よろを宜しく申

させられそうわっしで、私も、うんざり。

様子を聞くと、伝がこの事を意趣にして、子分子方の奴等がしよつちゆう附け廻すんだそうですから、私あ堪らなくなつて、舟賃を一銭出して、川尻を渡つて、佃島へ遁げました。

佃島には先生、不孝者を持つて多いこと苦勞をする婆さんが一人ね、弁天様の傍に吝な掛茶屋を出して細々と暮しています、子に肖ない恐しい堅気なんです。」

「何だい、それは、」

「私の母親でございます。」

「それだもの。」

「へへへへ、今更いたし方がありません、そこへ転がり込んで、居縮まつて震えてたもんですから、愛吉どうしたんだって、母親

が尋ねます。

これこれだといひますとね、それだから常日頃いつて聞かさないことではない、蟻じやあなし、毛虫じやあなし、水があつたつて対手あいては渡つて来ます。しかし……鯰の伝……それならば死んだおやし父爺が御恩になつた深川の勝山さんへ出入をするから、彼家あすこへ行つて、旦那様にお頼み申して、伝にいい聞かしておもらい申して、お前の身体からだを無事なよう計らいましよう、父爺ちやんが亡くなつてからも暑さ寒さにやあお見舞を欠かしたことがないという、律儀はこんな時用に立ちます、で母親おふくろが取りあえず。」

「深川へ参りましたね、母親おふくろが訳を謂いつて話をしますと、堅氣あきんどの商人あそびにんだ、遊あそびにん人あいてなんぞ対あいて手てにして口を利けるんじやあないけれども、伝よか、可よし、鯰しさいならば仔細しさいはないと、さらりと埒らちは明あいたんです。

わっし私はこんなやくざものの事ですから、母親も別に話さないでいたのがその時知れまして、そうか、そんな倅せがれがあるのか、床屋が家業と聞きやちようど可いい、奉公人も大勢居るこつた、遊あそびにんびながら働はたらきに寄越すが可いいと、深切におつしやつて下すつたので、二度目にはお礼かたがた、母親について伺うかがいますと、先生、吃驚びっくりしましたぜ。

中庭でもつてきやつきやつという騒ぎ、女中衆が三四人、池の周囲まわりを駆けてるんで、鬼ごっこがはじまつてるか、深川だつて呑気なもんだと、ひよいと見るとどうです、縁側に腰をかけてたのは山の井の診察所を見た、別嬪べっぴんだろうじやありませんか。

そうして女中が遁にげるのを追懸けますのは、恐しい、犬でも蹴けそんな軍鶏しゃもなんで。

今でも柳屋に飼つてあります。強いことツたら御用の小僧うしろなんか背後からはたかれて、ぎやつといつて、打ぶつ坐りまさ。

心持が可ようございますぜ、とさかを立たつてずつと伸のして、眼まなこをくるりと遣りますとね、私とでも取組とくみそうでき。一体気の勝かつた、お夏さんは癩癩かんしゃくもち持もちただけけれど、婦人おんなだけにどうするこ

とも出来ないんですから、癪なことは軍鶏と私とで引受けてるんで、ええ、可うごす、軍鶏と愛吉とで請合いましたと謂うと、蒼くなつて怒つてる時でも莞爾にっこりしまさあ。

お夏さんは飛んだその鶏とりを可愛がつてます。それから母おつかさん上ひなさまはいうまでもありませんが、生命いのちがけで大事だいじにしているお雛様ひなさまがありますよ。

じっけんだな

十軒店で近頃出来合の品物じゃあないんだそうで、由緒のあるのを、お夏さんのに金に飽かして買ったつて申しますがね、内裏様が一對、官女が七人お囃子はやしが五人です、それについた、箆たんす、長持はさみばこ、挟箱はさみばこ。御所車一ツでも五十両したツていいですが、皆みんな金蒔絵きんまきえで大したもんです。

このお雛様の節句と来た日にや、演劇しばいも花見も一所にして、お夏さんにかかる雑用ぞうよう、残らず持出すという評判な祭をしたもんですツさ。

わっしあちら 私が勝山に伺うようになりました 翌あくるとし 年、一昨年おとしですな。

三月三日の晩、全焼まるやけにあいなすつた。「といいかけて、愛吉あたりみまわは四辺あたりみまわをしたが、浮かぬ色をした。

声も低く、

「しかも私わっしが行合せていたんです。十時頃じゅうじつころでございましたね、

お雛様を見せておくんなさいって、勝手の方から。不断、皆様みなさんで可愛がつてくれますし、お夏さんも鼻屑ひいきにして下すつたもんだから、すぐにその何でさ、二階の座敷へ上りました。

目の覚めるような六畳は、一面に桜の造花つくりばな。活花いけばなの桃と柳はいうまでもありませんや、燃立つような緋の毛氈もうせんを五壇にかけて、炫まばゆいばかりに飾ってあります、お雛様の様子なんざ、私にや分りません、言つたつて、聞いたつて、ただもう綺麗で沢山。お夏さんは直ぐその壇の下の処ほんぼりに雪洞ゆきほらを控えて、立派に着換えていなすつたつけ。

あの内裏様のだつて、別に二個ふたつ蒔絵の蝶足のそうですな！……」
愛吉は卓テエブル子ゼンの上に四角な線を指の先で引いた。

「この位なお膳ぜんがありましょう、男雛おびなのと女雛めびなのと一对、そら、あの、」

金之助は熱心に耳を傾けながら頷うなずいた。

二十九

「可ようございますか、その一对の小さなお膳を、お夏さんが自分の前に置いて、もう一個ひとつの方を向うへならべて、差向いという形なりで居なすつたが、前には誰も見えなかつたんです。

指を丸まろげた様な蒔絵の椀、それから茶碗、小皿てしおなんぞ、皆みんなそのお膳に相当したのに、種いろいろ々な御馳走ごちそうが装もつてありましたつけ。

その後病気で亡くなりましたが、あの診察所に附いていた年増ね、乳母ばあやというんじやあなかつたんですが、お夏さんのお氣いきりに入いりで傍わきの処へ。もう二人、小間使が坐つて、これが白酒の瓶を持つ

てお酌をしてる、二ツ三ツ飲あがんなすったか、目の縁をほんのりさせ、嬉しそうに、お雛様の飾りものを食べてる処で。

や、素敵なものだと、のほうずな大声で、何か立派なのとそこいらの艶麗あでやかさに押魂おつたまげ消ながら、男おとこ気ツけのない座敷だから、私わつしだつて遠慮をしました。

いつものようにお台所へ下つてお末の出尻でつちりと一所に頂くべいとね、後退うしろじきりに出ようとすると、愛吉さん一ツあげましようかと、お夏さんが言ったんです。

まるで夢中、私あ腰が抜けたように突いきなり然なりそこへ坐りましたぜ。さあ、一面の桜と、咲乱れた桃の中、雪洞ほんぼりの灯あかりで見たその時の美しさ。

しかも微酔ほろよいと来ていましょう。もう雛壇ひなだんを退のけようという三日の晩、この間飾つてから起きると寝るまで附添ついでつて、階下したへも滅多たにやあ降りたことのないばかり、楽たのしみ疲れに気草くたびれ臥ふというなり形で、片手を畳について右の方に持つてなすつた小こ杯さかずきを、氣前よくつつと差してくんなすつたい。

震えながら……まったくですよ、震えながらそのお杯を受けようとすると、愛吉さんもうちつとそちらへと、傍はたから年増としぞうのが氣をつけたんです。

坐つたのは、お膳の前でしょう、これは先生。毎年々々そうやって差向いに並べても、向うへ坐つた奴はまだ一人も無かつたんだそうで。

お夏さんは朋友ともだちが嫌きらだつていうんです、また番頭や小僧が罷まかりで出ようという場じやありませんや。

しかもその年、一昨年おととしですな、その晩にや私わつしより一足前さきに、雛の間で一人お客があつたんです。

何でも天下に聞えた立派な豪傑じいな爺じいだそうですが、旦那とは謡の方で、築地の宝生の師匠うぢの宅ね、あの能楽堂などで懇意こんいになつてるんだつて謂いいましたよ。大層な雛だというが、どれどれと押上おしあがつて、やあ一人でやっていなさるの、私わしが相手をしようつて、そのお膳の前に坐りましたつさ。

お爺ちゃん、厭いやなこつた！ とお夏さんが屹きつとなつたので、傍はたの者はあツふあツふ、旦那も御新造ごしんぞう様も顔色を変えなすつたけ。

ははあ、これは遣られたと、肥った腹から大^{おおわらい}笑を揺り出して、爺さんは訳もなく座敷をかえ、階下^{した}で今、旦那、御新造様なぞと一座で飲んでいるという、その後でしよう。

だから年増は遠慮しろと氣を着けたんでさ。

するとお夏さんがね、可いよツて、言いながら、白酒の瓶を取つて、お酌して酔わしてやろうや。莞爾^{にっこり}してお前様^{さん}、いえさ、先生！」

金之助は啞然として、

「口の端^{はた}を拭^ふけ、泡だらけだ。」

愛吉は仇気あどけなく平手で唇を横に扱こいたが、すがめて掌たなそこを打眺め、「嘘、泡くツツなんぞ附着くツツいてやしねえ。」

と例の愛くるしい口を結んで眉根を寄せ、吐息をついて歎息した。

「ほんとうに考えて見りや夢の様ですよ。」

お夏さんは酌をしておくんなさる気で瓶を持ちながら、ふと雛の壇を見ましたがね、どうなすったんだか、おや！ といつてこう、瞳を据えて、瞬またたきもしないでしばらく。

枕についても目をぱちちり、お雛様の番をして、すやすやと寐ね息いきに簪かんざしの花は動いても、飾った雛は鼠一疋がたりともさせないん

でございますつてね、過いっか年もお雛ひな様が皆みんなで話をするツて、真面目に言いなすつたことがある位、凝こってるんだから魂が入つてましよう。

トその凝視みつめていなすつたツけ、ちよいとお囃子の人形が笛を落した、まあ、鼓を打棄うっちゃつた、まあ、まあ、まあ、太鼓の撥ばちを、あれ緋ひの袴はかまが動くんだよ。あれ、皆みんな！ とお夏さんがすつくり立つた。

顔を見合せて皆呼吸みんないきを呑みましたわ。

その様子ツたら、まるで雛がどつと惣立ちになつたように、私わ等っしらが胸に響いたんです。」「

語る時、十有数日の間を蒸しに蒸した、人類の汗を絞り抜いた、

一昨日来の気圧は、正にその極所に達したと見えて、陰々たる中にももの響ひびき、柱がきしむようである。

愛吉は肩をすぼめて、

「その途端に私等は雛壇が滅めつちや茶に崩れるんだと思いましたね、火事だ、火事だと、天井の辺あたりで喚わめいたと思うと、」

愛吉は穏かならぬ猿ざるまなこ眼まなこで、きよろきよると四辺あたりを見たが、たちまち衝つと立上った。

「先生、雨です。」という間もなく、硝子窓がらすまどに一千の礫つづいてばらばらと響き渡つて、この建物の揺ゆらぐかと、万斛ばんこくの雨は一注して、轟ごうとばかりに降つて来た。

金之助も、話の変と、急な雨に、思わず顔の色を変えて唾を吞

んだが、押出すように、

「おお、雨だ。」

台の上のボイは真ま先に飛び下りた、新聞を見ていたのは真ま

中なかを掴つかみ棄すてて立つ。立たつていたのは金かね袋ぶくろの口くちを圧おさえて、

この三人しばらくの間というものはただ縦横に土間の上を駆け歩あ

行るいた。白あい姿わたの慌たしく行ゆ交きうのを、見る者の目には極めて無意

味であるが、彼等は各めいめい々いに大雨を意識して四壁の窓を閉めよう

とあせるのである。大粒しずくな雫しずくは、また實際ななめ、斜ななめとも謂なわらず、直すと

もいわず、矢玉のように飛び込むので、かの兀はげ頭あたまの小男こなは先さ

刻つきから人知れず愛吉の話ききに聞き惚とれて、ひたすら俯うつ向むいて額かぶをおさ

えているのであったが、その手を放して天井を仰ぐと、怪訝けげんな顔

をして椅子を放れて、窓の下へ行つて、これはまた故々閉めてあつた窓の戸を一枚上へ押し上げて腰を捻つて、戸外へ衝とその兀頭を突出すや否や、ぱつたり閉めて引込ました、何条堪るべき、雫はその額から、耳から、頤の辺から、まるで氷柱を植えたよう。かかる中にも自若として冷静の態度を保ち、ことさらには耳を傾けて雨を聞こうともしないのは彼等士官の一群である。

ややあつて人々はあたかも軍人のごとく静まつた。

「障子をあけると、突然火の粉でしょう。」という声も沈むばかり、雨はいよいよ盛である。

「お夏さんが一番しつかりして、そのまま、内裏様に手をお懸けなすったが、愛吉、鷄とりをつて一声。聞棄てにして私わっしあ二階から飛び下りて、二ツ三ツ人の体に打附ぶつかつたとばかり覚えています。ええ夢中でね、駆けつけたのは裏口にあるその軍鷄しやもの埒とやなんですよ。

何を悟ったのか、ケケツケケツ、羽ばたきをしてる奴を引摑ひつつかんで両手で袖の下へ抱え込むと、雨戸が一枚ばったり内へ煽あおつたんですが、赫かつとして顔が熱かつたのも道理、見る間に裏返しに倒れ込むとめらめらと燃えてましよう。戸外は限かぎりもない狐火のよう
にちらちらちら炎だらけ。はツと後退あとじきりに飛ぶ拍子に慌てて

つんのめって、あおの仰向けに倒れたやつでさ。もう天井からあか紅い舌を吐いてるじゃアありませんか。目が眩くらんだ足の処へ、箱だか、鉄瓶だか重いものがはすつかい斜はすつかい違ちがひに来て乗つかるといさわぎう騒さわぎ。百年目だと思わっしった私わっしあ、板戸も壁も突破いきおいする勢いきおいで横ツ飛びに表の方へ匆はね出したんで、どしばたというのが地つちの底へ刻み込むように聞えるばかり。あツとも、きやつとも声なんぞはしませんでした。門かどぐち口へ出ると道も空もかわらけいろ土器色かわらけいろにばツとなつて、処々段々にこうその隈取つて血が流れたように見えましたつけ。

その中をね、あつちこつち三四人、大きな蟻の影法師が映つたようにまるで酔ツぱらいの足つきで、ひよろひよろしながら歩ある行あるいてましたが、奇代なもんでございますね、道なら三町ばかり伸の

したと思うと、洪どつと火の粉が浴びせて来ました。鶏は脇の処で恐
しい羽ばたきをしますね、私あその煽あおりで宙へ上りそうで足も地
つきませんや。背後うしろの方でも、前途まえの方でも、その時分からだによ
うワツという人声が陰に籠こもつて聞えました。やがて私の身からだは何の
事うずまはない渦うずまいて来る人間の浪の中に卷込まれてしまいました。
右左透すきま間のねえ混雑みんななんで、そいつあ皆みんな火事場の方へ寄せるん
でしょう、私あ向うへ抜けようとするんでしよう。

突当るやら、踉跄よろけるやら、目も口も開かねえんで、何でえ！

田舎ものが神田の祭にはぐれやしめえし、人ごみにまごまごす
る事あねえ、火事に逃げるたあ何の事だと、おされて剣突を食う
癩かんしやく癩かんしやくまぎれに、立直たてなおして引返そうとする、と気が着きまし

た。鶏を抱えてます、そいつはただ一言お夏さんに頼まれたから起つた事。

ホイ何のこつた、行くにも帰るにもこの騒ぎに揉まれちゃあ、羽も翼も坊主にならあ、と吃驚びっくりして、背後うしろは見ないで、抜けたり、潜くぐったり、呼吸いきぐるしいほどの中をもぐつて出て、まず水のある処へ行きましたかね。

水ツてのは何、深川名物の溜池ためいけで、片一方は海軍省の材木の置場ばなんで、広ツ場。

一 体堀割の土手続つづきで、これから八幡前はちまんへ出る蛇うねの蜿うねつた形ひとすじの
一 条道すさきですがね、洲崎すさきへ無理情しんじゆう死うでもしに行こうツて奴よ

り外、夜分は人通のない処で、場所柄とはいいながら、その火事

にさえ、ちつとも人間が歩ある行きません。気のせいか、かつかつと燃える中に、木竹の折れる音もするほど近間で居て、それで何と私の登あしおと音にばらばら蛙かわずが遁にげ込みます。水の音を聞くと一杯のんだ気になって、一呼ひといき吸吐いたんですが、——はてな。」

三十二

「そこでお夏さんだ、どうなすつたろう。私わっしがこの慌て方じゃあ二階に残った女連れんは気絶ひきつけたかも分らない。お夏さんはお夏さんで、雛を大切に取出しそうな権幕だったが、火急にも何にも内裏ひとつ様一個抱く時分にやあ、火の粉を被かぶんなすつたに違いがないと、

さあ、心配になつて堪りません。

矢でも鉄砲でも火事場へ飛んで歸つて、お夏さんの様子を見よ
うと、引返そうとすると、抱えている鶏なんです。

先刻のあの場合にも、愛吉鶏をツてお謂いなすつた、どうしよ
う、これをまあ。

葛籠長持と違つて、人の家へ投ツ放しに預けて来られるんじや
あなし、庇つて持っていた日にやあ、人混の中だつてうっかり
歩行かれるんじやあねえ。火の中から助け出したばかりで、跡を
お去らばにして可い位なら、お夏さんがお頼みはなさるまいし、
私だつて頼まれる程の事じやあなし、困りましたね、どうも、何
しろ活物だから始末が悪かつたらうじやアありませんか。

人通のない土手だつて、軍鶏ばかり置いて行きや、どこへ去いつちまうも知れたもんじやアありませんね。見りや溜池の中に舟もあつたし、材木もありましたが、水死どぎえもん人を捜すように鶏を浮うかしとく数すうじやありません、持扱すいましたね、全く気が氣じやあなかつたんで、一羽抱え込んで跣足はだしで池の縁をまごまごしてる風ツてのはありません、我ながら薄ぼんやり、どうしてるのかと思ひました。

火事はまだ盛さかんです。

すると灰のように薄赤い向うの路へ影がさして、四五人ひとなら一ひ列びになつて来るのがあります。土手を横に切つて、あれから埋地にかかった橋の、欄干が真中まんなかで切れて水へ折れ込んでいよう

という、ぺんぺん草の生えてる袂たもとへ寄って、渡ろうとする時分にやあ私が居る間近になったから見えました。

真ま先さきが女で、二番目がまた女、あとの二人がやつぱり女、みんな顔の色が変つてまさ、島田か銀杏いちしようがえし返か、がツくり根が抜けて、帯ひさずを引摺ひさずつてるのがありますね、八口の切れてるのがありますね、どれもこれも小刻みに、歩ある行くと絡からむのは燃立つでしよう。

てんでてんで一人々々に人形だの、雛の道県だのを持つてる、三人目の、内裏様を一对、両手に持つて、袖で搔合して胸おっつに押着けていたのがお夏さん、夜目にも確か、深川中探したつて、およそその位なのはないのですからね、……助かった。

つかつかと駈^かけ寄つて、背後^{うしろ}から、ちようど橋の真中へその一組のかかつたのを、やあ、と私あ嬉し紛れに頓^{とんきよう}興^{きよう}な声を懸けました。

屹^{きつ}と立留つて、黙つて私を見なすつた、その時のようにお夏さんの、あんな氣高い凄^{すご}い顔を見たことはありませんでしたよ。鬢^{びん}の毛も乱れています、それに、場所がそんなでしょう、天を焦す明^{あかり}でしょう。つい目の前にあの、愛吉、鶏をツて謂いなすつた二階の景色が見えるのに、急に變つてそれなんでしょう、こりや死んだ魂^{たま}が直^{すぐ}とここへ映るのか、そうでなけりやお夏さんの守護をして、緋の袴の連中が火の中から化けて来たのだ。」

「ちようどその時分下火になったと見えまして、雲が颯さつとかかつたように、一面赤かつた中へ黒味がさしましたわ、女連の姿は消えたよう、お夏さんばかりが判然はつきりと、ぱっちりとした目の色も見えて、私が手の鶏を御覧なすつたが、何、あとののは張詰めた気が弛ゆるんだか、足取が乱れて、あっちへふらり、こっちへひよろり、一人は危けん険のんな欄干もたに凭もたれかかりましたし、もう一人は何の事はない、そこへ打ぶつ坐すわってしまつたんです。手を取つて起して見りや、松ツていう女中なんで、怪しいも怪しくないも、場所だつて不思議はありません。

全体この橋も、池を渡った向うも、旧はやつぱりその時分の勝山さんぐらいな御大家の庭だったんで、橋がまた庭の景色の一つだったそうですが、馬、車なんざ思いも寄らず、人ツ子だつて通りやしません。ただね、材木を組んで筏いかだを拵こせえて流して来るのが、この下を抜ける時、どこでも勝手次第に長なが鍵かぎを打ぶち込んで、突張つっぱつて、潜くぐるくらいなもので、旦那が買か置かつなすつた。その中うち綺麗にして、藤棚の池へ倒れ込んでるのなんぞ直したら、お夏さんの祈き禱がんじよ所じよみたようのもの、勝山さんだけの弁天様の堂を建立しよ。うなんてね、いつていなすつた、その埋地にへ遁にげて来たんでさ。考くえて見るとそれなんです、不意に打ぶつかった時はこの世のこ
とじゃあないように思いましたよ。」

「大分涼だいぶんしくなつて来た。」と金之助は袖を合せて、想い出したように言いつつも、領うなずき領うなずき聞くのである。

「へい、凄わづいような雨でございましたね、私わつしあどうなるんだ知らんと、お話をいたします内に気が変になりましたつけ、可いい塩あんば梅いでございます。

いいえ、私ばかりじゃあなかつたんで、火事場では、官女が前あ後とさきを取巻いて、お夏さんが東の方に、通つたと謂う評判で、また勝山が焼けるちつとばかり前、緋の袴はを穿はいた素まっしろ白しろな姿まの者が、ちようどその屋根の上あたりを走るのを、汐しおみばし見橋の上で見た者がある、前兆だなんて種いろん々なことを謂つたもんです。

ようよう夜が夜の色になつて、湿っぽい風が吹いて来ると、御

新造様、それから旦那が、あとさきになつて、女中が三人、私とお夏さんと、お雛様と軍鶏の居るその埋地へお見えなさいました。が、どなたも箸はし一本持つちやあいらつしやらないんで、追々集つた、番頭小僧、どれも不のこらず残着のみ着のまま。

もつとも私が二階を飛下りると、入違いに旦那と御新造様ごしんざんがお夏さんの処へ駆け上んなすつたツけ、傍はたに居た女中は助けてくれというんでしよう。手を合せてただ拝む程とちつてるのに、袂たもとのさきを口に啣くわえてお夏さんは悠々とお雛様を片付けていらしたつてね、皆みんな来い、お夏が死ぬ、お雛様だけ出しておくれと、お二人が一生懸命。

それですもの。

こういいますと、お夏さんが我儘三昧、親御は甘いばっかりに聞えましよう、けれども因縁事なんですよ、だって勝山のものといったら、池に浮してあつた材木まで焼けツちまいましたから。業の火とかいうんですな、恐しいじゃありませんか。

それでね、一度その埋地で家が寄つたが最後で、あとはもうちりちりばらばら。」

三十四

「雛は皆助かりましたし、飾の道具といったような物も、目立つたのは大抵出たんだそうですが、珠だの、珊瑚だので飾つた、天

人が胸に掛けてるようなびらびらの下った女雛の冠ですが、無くなつて、それから房のついた御簾みすのかかつてる結構な、一品ひとしなで五十両、先刻さつきも申しましたね、格別わつし私なんぞも覚えてる御所車がそれツきりになつたんですつて、いつまで経たつても、お夏さんが太ひどく氣にしていますかね、もとより金目にかかわつたことじゃありません、あの姉さんのことですから、へい。

大方何でしょう、人並はずれて雛を大事がんなさるんでも分ります、そこらの様子でも知れますが、こう謂いつちやあ何ですけれども、お雛様をまず恋しい方のようにでも思つてるんじゃないやアありますまいか。

そうすると、対手あいての女雛を自分ごツこにでも極きめているんで、

その冠が失うせたのも、許いいなずけ嫁あたまの印かんざしの簪かんざしでも落おしたように思おもつて
 ることでしょう、婦人おんなは天窓あたまの物と謂いいますから。

実まことに碎くだけていて、ちつともみずからがらない女ひとだけれど、どこ
 か恐おそしく品しながあつて、私わたしなんざ時々我われながら頭つむりの下したがることがあ
 りますもの。

ねえ先生、御所車ごしよぐるまと冠かんむりがなくなつたのを、氣きにして鬱ふさぐ位くらいなの
 が、今更いまじゃアありませんけれども、上野あづまを歩ある行ゆくいて、路みち傍ばたで
 身体からだを洗あらつて、ちやぶ屋ちやぶやの姉あねやと間違まちがえられて、癪たむしむすめの女むすめを、ちよ
 いと先生、お夏なつみさんもそういつて話わしなすつたが、山河内やまがわうちの姫ひめ
 様さまというまと一件いっけんもの女むすめですつき。其そ奴いつを煽あおがさされるなんて可い
 哀あは相あじゃアありませんか。

いいえね、竜宮の乙姫てえ素ばらしいのだった、蜈蚣むかでにやあ敵かないませんや、瀬多の橋へあらわれりや、尋常の女でしょう、山の主が梅干になつて、木樵きこりに嘗なめられたという昔話がありますツてね、争われねえもんです。

全体ちやきちやきの深川ツ女こが、根岸くんだりへ行つて、ももんじいに歌を習うなんて、そんな間違つたことはないんです。郷に入いつたら郷に従えだと、講釈で聞いたんですが、いかな立女たておや形までもあの舞台じゃあ睨にらみが利かねえ、それだから飛んだ目に逢うんでさ。

それが先生、一体がお夏さんは、歌だの手習だのは大嫌だいきらひで、かもがわ鴨川なんて師匠取をするんじやあないんですが、ただいま申し

ましたその焼け出されがただごと只事じゃアありません。前世の業ごうのよ
 うなんだから致し方はありません、柱一本立直らないで、それだ
 けの身しんしょう上しょうがまるフイで0。氣ばかりあせつていなさるうち中に旦那が
 大病、その御遺言よしでさ、夏に我儘をさせ過ぎた。行末が案じられ
 る、盆画よしなんぞ止にして手習をしてくれと、そこで発心をなすつ
 たんだが、なあにもう叩き止めツちまうが可ようごす。その足で藤
 間へいらつしやりや、御自分の方が活きた手本えんきりになろうてんで、
 ええ私の仕返しや動かねえ縁えんきり切だ。お夏さんがこれから行こう
 たつて行かれやしません、さっぱりして可ようございます。へい、
 いちいちどうも難ありがと有とうございました先生。

あなたのような紋もんつき着きを着た方が、私等わつちたちを可愛わつちたちがつて下さろう

とは思わなかったんで、柳屋のも便たよりにするものはなし、この頃は御新造ごしんさん様が煩わづらつていらつしやるなり、あの勝気なのが、めつきりや瘦やせなすつた。

力ちからになろうというのが私わつしと軍鶏ぐんけいだから困こまつちまう。」と、つくづく腕うでを組くんであどけない、罪つみのないことを真心まごころから言いつて崩折くずおれた。真面目まじめな話わに酔よもさめたか、愛吉あいきちは肩かた 肱ひじを内端うちばにして、見ると寂さみしそうで哀あわれである。雨あめは霽はれた、人は湯ゆさめがしたようあつさに暑あつさを忘われた、敷居しきいを越こして溢あふれ込んだ前まへの大溝おほいちまの雨あま溜だまりで、しつたつたしい叩たたきの土間どまは一面いっぺんに水みづを打うつたよう。

愛吉がいう処も、大雨の後をそよ吹く風も、太くいた身に染みた様子であった、金之助は改めて硝子杯コップを挙げ、「もう一杯ひとつ景氣をつけよう、大分引込まれて私まで妙になった、お前にも似合わない何も鬱ふさぐにも当るまい、」と、激はげます人も何となく理に落ちて来たのである。

「ええ、この位にしておきましょう、何年ぶりかで不思議にこうやって折角真面目になったものを、また酔つまつちやあ詰りません、ねえ先生、どうぞ可愛がつて下さいまし、私わっしはくらい酔つてそれなりけりでも構いませんが、お夏さんはほんとうに誰たよりも便にするものがないんですから、後生でございます。旦那方のような紋着

を着た方は大嫌なんだけれど、何、実の処は私等を軽蔑して取合
つて下さらないと相場が極きまつてるとおもいますから、じゃじゃ馬
ですねてるんでさ、心細うございます。ほんとうにお夏さんは便
りのない身でおいでなさるんですからね、御不便ごふびんがありや、直ぐ
にでも柳屋へ引張つて行つて見せてえや、そしてこの先生がお前
さんのことを身に染みて聞いて下すつたつて話したら、どんなに
か喜ぶでしょう。」とさも懐しげにいうのである。

金之助も他所事よそごととは取らない気色けしきで、

「いや、私はこれでなかなか当世じゃあないんだから、女の児こと
お附合はちつと困る、しかしお前とは改めて朋達ともだちになろう。な
あ、朋達——そうだ親類とでも何とでも思いなさい。用に立つこ

とがあつたら出来るだけ智慧ちえも貸そうよ、身体からだも貸そうよ。込入った話でそのお夏さんのことについてちや、こりや懸直かけね無し私も一ツもの思いだ、帰つてからも路々すじも条たどを辿つて考えよう、いやしかしお底かげでおもしろい……といつちやあ済まないような氣もするね。」

「はい、」といつたツきり、愛吉はしばらく差俯さしうつむ向むいていたが、思出したように天窓つむりを上げて、

「飛んだ頂きました、もう御免ごうむを蒙かぶります。」

「一所に出ようか、そこいらまで同じ向だ。」

金之助は愛吉が返した、根岸の鴨川の討入おとしの武器なる黒糸緘おとしの五ツ紋を、畳んであるまま懐ねじこへ捻ねじ込んで、ボオイを呼んで勘定を

すると、件の金袋くだんを提げたのがその金袋は蓋し代金を受納めるために持っているのではなく、剰金つりを出す用意をしているものよ
う、規則正しく返したのに、銀一ツ添えて金之助はここに長座を
償ったが、断るまでもなく、ボオイはこれを別の衣兜かかしに納れたの
である。

「御機嫌よろしゆう、」

それと二人は卓子テエブルを挟んでさしはさひと
前あとしさき後あとになつて出ようとする、横合の椅子から、

「やあ、」と声を懸けたのは、件のくだん元はげあたま頭のく小男であつた。

金之助ははじめて心着いて、はたと立留つて顔を見て、不意だ
という面おももち色いろで更に見直したが、

「おお、どうして、」と驚いて言った。

ここに先刻さつきからおみこしを据えて、愛吉の物語に耳を傾けたり、士官の方をじろじろ見たり、あるいは空そら合あひを伺つてびつしよりの奇観を呈するなど、慌てたような、落着いたような、人の悪いような、呑気なような、ほとんど端たん倪げいすべからざる、たとえば竜りょうのごとき否、むしろ大雨に就いて竜を黙想しつつありしがごとき、奇体なる人物は、渾名あだなを外道げどうと称とななえて、名譽じゆんぶうの順風耳、金之助おなじと同一新聞社の探訪員で、竹永丹平たんぺいというのであった。

三十六

軒の柳、出窓の瞿^{なでしこ}麦、お夏の柳屋は路地の角で、人形町通^{どおり}のとある裏町。端から端へ吹通す風は、目に見えぬ秋の音^{おとずれ}信である。

まだ宵の口だけれども、何となく人足稀^{まれ}に、一葉二葉ともすれば早や散りそうな、柳屋の軒の一本^{ひとつもとやなぎ}柳に、ほつかりと懸^{かか}つている、一尺角くらいな看板の賽^{さい}ころは、斜^{ななめ}に店の灯^{ともしび}に照されて、こつちへは一が出て、裏の六がまともに見られる。四五軒筋^{すじ}違^{ちが}いの向う側に、真赤^{まっか}な毛氈^{もうせん}をかけた床^{しやうぎ}几の端が見えて、氷屋が一軒、それには団扇^{うちわ}が乗ってるばかり、涼しさは涼し、風はあり、月夜なり。

氷屋の並びに表通から裏へ突抜けた薬屋の蔵^{うしろ}の背があつて、壁

を塗かえるので足代あししろが組んである、この前に五六人、女まじり、月を向うの仕舞屋しもたやの屋根に眺めて、いずれも、蹲つくばつて雨上りに出たひきがえる墓という身で居る。

「え、もし。」

「さようでございますね、」

「どうでしょう、」

と口々にどれが何をいうのか知らず、低声こごえでひそひそ。

「ねえ、おい、」

「どうだろう、」

「そうさな。」

時々吸殻が呼吸いきをして、団扇が動くわ。

「構わず談じようじやあねえか、十五番地の差配おおやさんだと、昔か氣質たぎだから可いいんだけれども、町内の御差配ごさいはいはいけねえや。羽織袴ステッキで杖スツキを持とうという柄だもの、かわつて謂いつてくれねえから困るよな。」

「むむ、だが何しろ打棄うつちやつちやあ置かれめえ。」

「もし、確いに不可いますまいね。」

ちと老ふけた声で、

「されば宜しくござりません、昔から申すことで、何しろ湯屋で鐘ねの音を聞くのさえ忌いむとしてござります。」

「そして詰る処、何に障るんですね。」

「いえはじまりは地震かと思うてびくびくしていたんで、暑さが

酷ひどかつたもんだからね。それという時の要心わっしだ、私どもじゃ、媽か々かにいいつけて、毎晩水瓶みずがめの蓋ふたを取つて置きました。」

「へい、火事ならまあ、蓋を取る内も早いが可いというんでしようが、地震に水瓶の蓋を取つて置くはおかしいね。」

「理詰じやあねえんでさ、まずいわばお禁まじない厭いさ。安政の時に家うちぢゅう中ちやられたのが、たった一人、面くらつて水瓶の中へ飛込ん

だ奴が、不思議に助かつたと謂いますからね、よくよく運だ、あやかるだけでも可ようございましょう。」

「お待ちなさい、して見ると鉄さん。」

「ええ。」

「お前さんがこの頃また毎晩色ものの寄席ゆへ行くのはやっぱりそ

こちらの地震除よけから割出したもんだね。」

「何故なぜ、何故、ええ御隠居。」

「麴こうじまち町の人がね、同一おなじその安政年度に、十五人の家内でた

った一人寄席へ行つていて助かったものがありますわい。」

「ざまあ見やがれ、俺おいらが寄席ゆへ行くのを愚ぐずぐずぬか々々吐しやがって、

鉄さんだつてお所持持だ、心なくツて欠けちりん厘でも贅むだな銭を使うも

のかい、地震除だあ、おたふくめ、」

「おや、それじゃあ地震よけに、いつも寄席に行つて、お前一人助かる気かい。」

「何だと。」

「いいえさ、お前一人助かれば女房は可いのかよ。」とそのかみ

物で。

鉄と謂われたのはやつきとなり、

「やい、じゃあ汝^{うぬ}あどうだ、この間鉄砲汁をやツつけた時一箸^{ひとはし}

も食やしめえ。命取だ。恐しいといって身震^{みぶるい}をしやあがって、

コン畜生、その癖俺^{おいら}にやあ三杯と啜^{すす}らせやがって、鍋底をまた装^も

りつけたろう、どうだ、やい、もう不可^{いけ}ねえだろう。勿体ない打^う

棄^{つちや}った処で犬だつて困るだろうと謂つたじゃあねえか、犬だつ

て困るよ、命取をよ、亭主が食つてるのを見て汝一人助かりや可

いのかい、やい、七面鳥。」

「東西！」

「さあお家の乱れだ。」

「さてはこの前兆かッ。」

かたわら
傍より、

「もし何でございます。」

「牝ひんけい鶏のあしたすると言うて、牝めんどり鶏が差し出るからよ。」

「ええ、牝鶏があしたなら構いませんが、こうやって頭つむりを集めて

いるのは、柳屋の雄おんどり鶏が宵啼よいなきをするからでございませぬ。」

「うう成程、雄鶏だっけの。」

ごじょうだん
「御串戯、」

「これはやられた。」

「皆みなさん様笑いごとじゃありませんぜ、火に障るつていうのじゃ

ありませんか、ねえ御隠居。」

「されば……謂うて。」

「御隠居さんなんざ齒に障りましようね、柳屋のは軍鶏しやもだから。」

「誰だ、交ぜるない、嘉吉かきちが処とこの母親おふくろさえ、水天宮様へ日参をするという騒さわぎだ。尋常事ただごとじゃあねえ、第一また方に一つ何事もないにした処が、心持が悪いじゃあねえか、宵啼いやなんて厭いやなものだ、ほんとうにどうかしようじゃあねえか。」

「どうするツて、殺しつちまえば可いいでしよう。」

「そうだとよ。」

「それはもう禍わざわいの根を断つのだから、宵啼をする鶏は殺すものとしてあるわさ。」

「そこで、」

「謂つたつてあの女が肯くものか、どうして可愛がることといつたら、」

恐しく声を密めて、

「御隠居の前ですが、お内の猫ぐらいなものじゃありませんぜ。」

「まずの、」とあやふや。

「だから差配おおよさんに懸合つてもらつてよ。」

「その差配さんが今謂う杖ステッキだ。」

一段声を張上げて高らかに策を献ずるものあり。

「交番々々。」

「馬鹿をいえ、杖でさえ不可いねえものが、洋サアベル刀で始末におえる

かい。構うこたあない、皆で押懸けて行つてあの軍鶏を引奪くつてしまふとするだ。」

「大勢でか、ちと変だな。」

「何さ、あいて対手がどうというんじやあないが、一人や二人ではさすがに話しにくい。」

「気の毒なり、可哀相でもあり、」

「まあ、何にしろ困つたものだ、今夜にも宵啼が留みさえすりや、ああもこうもないんだけれど、留まなきやあ、事のねえ内よ、気の毒だが仕方がねえ。」

風はさらさらと軒を渡つて、ああ、柳屋で鶏が鳴く。

三十八

「蔵人、蔵人。」

涼しい声で、たしなめるように呼懸けながら、店の左手ゆんでに飾つた硝子戸がらすどの本箱くつつに附着けて、正面から見えるよう、雑誌、新版、絵草紙、花骨牌はながるたなどを取交せてならべた壇の蔭に、ただ一人居たお夏は、小さな帳場格子の内から衝つと浴衣の装なりで立つと齊ひとしく、取と着つきにたんす箆はのほのめく次の間へだての隔よしずの葎はすはを蓮葉はすはにすらりと引開けて、ずっと入ると暗くて涼しそうな中へ、姿は消えたが、やがて向直つてつかつかと店へ出た、乳のあたりにその胸を置かせて、翼に手をかけ抱いたのは、お夏が撰んで名をつけた、蔵人という

飼かいどり鶏どりである。

「何なぜ故な今時分啼なくんだね、」と人にもものを謂うような、されば宵の一声にお夏いそがが忙いそがわしく立たつたのは、あたかも寐ねかしつけた嬰みどり児ごが、求めて泣出なすのに、嫁よめがその乳房ちちを齎もたらすがごとき趣そとであつた。

「お前さきみ、寂さみしいのか。」

淋さみしいのかと謂いつて、少すこしく抱かきあげて、牙きばのごとく鋭くちばしき嘴くちばしにお夏は頬ほの触ふらぬばかり、

「私わたしだつて店みせに独ひとりで居いるんだもの、我儘わがままでございますよ。」

くるくると動かす蔵人の目は光あかりつて、ものに動うごずる風情ふうせいあり。

「母おつかさん様さんは塩あんばい梅ばいが悪いし、寝ねていらつしやるじやありませんか、

人がね、宵啼をするツて忌がります。不可いよ、厭だよ、幾度
 言つて聞かせるか知れないのに、何故言うことをお聞きでない。」
 と品ある目で屹と見たが、傾けている片頬から顔の色が和ら
 いで、

「あかり灯を見せてあげようね、宵ツ張たらないのだもの。」

店の真中へ二足三足、あかり前へ、お夏は釣洋燈の下に立

ち寄つた。新版ものの表紙、錦絵の三枚続、二枚合せ、一枚もの、

なかんずく就中飼鶏がぱつと色彩を放つて、金、銀、翠、紅、紫、あら

ゆる色のここに相応ずる中に、墨絵に肖たる立姿は、一際水が垂
 りそうである。

「お祭だわねえ、あかり灯がついて賑かだらう。」

飼鶏は心あるごとく炫まばゆい洋燈をとみこう見た。楯たてをも碎くべきその蹴爪けづめは、いたいたしげもなくお夏の襟にかかっている。

「あつちを御覧、綺麗じゃあないか、音羽屋だの、成田屋だの、片市かたいち……おやおや誰かの姫君様といったような方がいらつしやる、いやに澄してさ、高慢な風じゃあないか、お前知ってるかい、何が合が点ってんさ、」と言いかけて打微笑うちほほえみ、

「何にも分らない癖に、おもしろいかい、そうかい。これは相撲の番附、こちらが名人鑑かがみ、向うが凌雲閣りょううんかく、あれが観音様、瓢ひ箆ようたんいけ池いけだつて。喜蔵がいつか浅草へ供をして来た時のようだ。

お前あの時分はおとなしかつたつけ、この頃はまるで嬰児あかんぼのようじゃあないか、夜啼をして、良い児だからもうちつと遊んだら

あっちへおいで、可いかい。夜になって疍へ入るのは何もかわつたことはないけれど、何だか淋しそうで可哀相だねえ、母様と二人ばかりになつたつて、お前、私が居れば可いじゃあないか。」と、いつか独言ひとりごとをいいながら段々軒に近づいた。

「まだ見たいのかい、さあ、何にしよう、これは軍の絵でござい
ます、」と謂つてお夏は胸を反らし、黒目勝がちなのを仰向くと同時に、両手で上へ差上げたが、翼の尖が鬢さきにかかつて、

「あら髪がこわれるよ。」と思わず手を放した、飼鶏はどんと身を落して、突立つて土間へ下りた。

三十九

溝石で路を劃くぎつて、二間ばかりの間の軒下の土間に下りた、蔵人は踏留まるがごとくにして、勇ましく衝つと立ったが、秋風は静々と町の一方から家毎やごとひさしの廂を渡つて来て、ちようどこの小さな散ちりぎわ際の柳を的あてに、柳屋へ音信おとずれたので、葉が一斉なびに靡なびくと思うと、やがて軍鶏おとしげの威おののゆら毛を戦おののゆらき揺いで、それから鶏を手から落した咄と嗟つさの、お夏の水髪を二筋三筋はらはらと頬ほに乱ごして、颯さつと吹いてそのまひっそりま寂ひっそり寞ひっそり。

この名残なごりであろう、枝に結えた賽さいころは一ツくるりと廻まつて、三が出て、柳の葉がほろりと落ちた、途端とたんに高く脚をあげて、軍鶏みせさきは店前みせさきをとツとツと歩ある行き出した。

お夏は片手をついて腰をかけて、土間なる駒下駄の上へひとひら一片の雪かとはかり爪先をかけて、うっかりとなつた。フトその飼鶏を念頭から奪い去られたのであろう、もの思おもひをする人の常として、こうは思いがけずしばしば心を失うのである。

その間に軍鶏の健脚は、猫の額のごとき店みせ頭さきを往復することをもつて満足が出来なくなつた。

かつて黒旋風愛吉をして、お夏のいちだく一諾おもんを重おもぜしめ、火事のあかりの水のほとりで、ゆめうつつ夢現いざなの境に誘いざなつた希代の逸物いちもつは、制する者の無きに乗じて、何と思つたか細溝をひとまた一跨ひとまたぎに脊伸びをして高々と跨ぎ越して、小路の真中へずっと出て、あたかも西側を離れて、これから東側へ廻ろうとして、狭い町の屋根と屋根と

の中空へ来た、月の下にすつくとこそ。

土蔵の前に集った一団の人の驚きは推するに余りある次第である。
ろう。

渠等かれらが額を集め、鼻を合せ、呼吸いきをはずませて、あたかも魔界から最後の戦たたかいを宣告されたように呶々どどしている、忌むべき宵啼の本体が、十間とは間を措かず忽然こっぜんとして顕あらわれたのであったから。

あまつさえ這個しやこの怪禽のぼは、月ある町中へつツ立つと齊ひとしく、一振りふつて首を伸のばして、高く蒼空あおぞらを望んでまた一声、けい引おう！ と叫んだ。

これをしも忌み且つ恐れたる面々は、鳴声があとを引いて、前町裏町すべて界隈かいわいの路地の奥、土蔵の隅、井戸の底、屋根裏、

階子はしごの下、三階、額の裏、敷居、鴨居かもいの中までも遠く響いて押拵が
 がつて行くゆに連れて、次第に霧が起り、月がかくれて、ほとんど
 名状すべからざるありさまに變ずるがごとく見て取つた。
 鷄鳴けいめい曉を報ずる時、夜のさまが東雲しののめにうつり行く状さまは、い
 つもこれに變らぬのであるけれども、月さえやや照てらし初そめたほど
 の宵の内に何事ぞ。

宵啼をもつて、火の神の町を焼く前驅とする者の心には、その
 声の至る処、路地の奥、土蔵の隅、井戸の底、屋根裏、階子はしごの下、
 三階、額の裏、敷居、鴨居の中までも、燃えんとして火氣はびこの蔓まり
 伝わる心地がして、あわれ人形町は柳屋の店を中心として真黒まっくろ
 な地図に變ずるのであろうと戦慄せんりつした。

「ワッ！」

古浴衣を蹴返して転がるように駆出したのは、町内無事の日参をするという、嘉吉が家の婆様じや。

四十

と見れば白髪を振乱し、頤おとが細いつて瘦やせさらばい、年とし紀六十に余るのが、肉ししの落窪しんだ胸しに骨しのあらわれたのを搔かいはだけで、細帯しばかり、跣はだ足しでしかも眼まなこが血走まり、薪まき雑ご木つを引ひ搦つんで、飛出したと思うと突いき然なり、

「火事だ、」と叫んで、軍鶏を打とうとしたが、打外した。

蔵人は咄嗟とつさに躲かわして、横なぐれに退すつたが、脚を揃えて、背中を持上げるとはたと婆ばばに突つかけた。

「火事だ、」

また喚わめいて件くだんの薪雜棒を振廻す、形相あたかも狂者のごとく、いや、ごときでない、正に本物である。蓋けだし小金も溜たまつて、家だけは我物にしたというから、人一倍、むしろ十倍、宵啼よいなきに神經こころを悩まして、六日七日得えも寝られず、取り詰めた果はてが逆上をしたに違ひはないので。

白髪は飛んで、翼は乱れた。あれよと見る間に、婆と軍鶏と、とんと当り、颯さつと分れて、月下にただぐるりぐるりと廻った。

「汝うぬ、業畜生、」と激昂げっこうの余り三度目の声は皺しわ噎がれて、滅多打

に振被ふりかぶつた、小手の下へ、恐おそれ気もなく玉たまの顔かんばんせ、夜風に乱るる
 洗髪ひっかの島田を衝つと入れて、敵かたと身体からだの擦合あうばかり、中を割つて
 引懸ひっかけにぐいと結むすんだ帯うしろの背後うしろへ、軍鶏かばを庇かばつたのはお夏である。

「お婆さん何をなさるんです。」

ちよいと横顔で振返つて、

「叱しつ！」

軍鶏すくも窘すくむようであつた。婆は恐おそれしい目をしながら、胸に波を
 打たせて肩で呼吸いきだ、齒くいしを喰く緊しめて口が利きけず。

かかる処へ殺氣ころしを籠めて、どかどかと寄せて来た、お夏と蔵人
 とを中に、婆の右左へかけて取巻いたのは土蔵てあいの前に居た連中。

「何だ、火事だ。」

「火事だ？」と口々に尋ねたが、これは事件ことの緒口いとぐちを引出さうとするに過ぎない、皆々は云うまでもなく、その間の消息を解していた。

「こ、こ、こいつじゃ、火事はこいつじゃ。」

人数にんずが襲きたい来つたので思わずおさえていた袂たもとが弛ゆるんだ、お夏の手を振放して、婆は蔵人に躍りかかった。

「何をするんですよ。」

遮おさろうとするお夏の帯を、ぐいと留めた者がある。同時に婆を突退つきのけて、

「まあ、待ちなさい、」と一名。

発奮はずみをくらい、婆は尻餅しりもちをついて、熟柿じゆくしのごとくぐしやりと

なつたが、むつくと起き、向をかえると人形町通の方かたへ一文字に
駆け出した、且つ走り、且つ声を絞つて、

「火事じゃ、火事じゃ。」

「あれ。」

嬰兒あかんぼを懐なつにしつかとおき圧え、片手を上げて追懸けたのは、嘉吉
の家の女房うち かみさんである、亭主その晩は留守さ。

「さてお夏さん、思切つておくんなさい、二三日前から薄々様子は知つていなさろうがね、町内じゃあ大抵気にするツたらないんだから、一番ひとつね、思切つて私等わたしどもに鶏とりをおくんなさい。何も宵啼よひなげしをすりやこうと、政府おかみからお触ふれが出たわけじゃないけれども、可ようがすかい、心持だ。悪いことはい謂いいませんや、お前まへさんのお為ために

その方が可よかろうと思うからね。」

お夏は黙かこみつて罫の中に居るのである。

四十一

「どうです、御承知だろうね、町内じやあお前さんの家うちが第一いっち新顔だから、何かその辺にものでもあるように思われては迷惑、可うごすかい、分りましたろう。」

「軍これ鶏を寄越せつて謂うんですか。」

「さようさ。」

「連れてつてどうなさるの。」

「占めるんでえ、殺やつちまうんでえ。」

と鉄だろう、打ぶちまけた。

慌おもいて騒おもいぐと思の外、お夏は莞爾にっこりして、

「不可いけませんわ。」

「不可ねえと！」

「まあまあまあ、静かに言っても分ることだ。もし、不可ませんなんてそう平気でいられちやあ困るじゃあごわせんか。一体、母おつかさんつかさんに懸はず合う筈はずなんだけれど、御病人だからお前さんだ、見なすつたろう、嘉吉とこさん許とこのなんざ、あの騒さわぎ。」

「御免なさいな。」となお笑いながら平気なもので、お夏は下に居たもとて片袖たもとの袂たもとを添ゆんでえて左手ゆんでを膝ゆんでに置いて、右手めてで蔵人そびらの背なを撫なで

た。

「仕ようがないねえ。」

顔を見合せたのが二三人、談判委員もちと案外という語気で、
「呑氣のんきにどうも軍鶏はなしと談はなしなんかしていられちや困りますよ、ちよこまかした事とは違ちがいますぜ。」

お夏は振仰いで、

「ですから御免なさいまし。」

「あやまるの、あやまらないのというような岡おかつたるいこつちやあないんだというに、困こまつちまうな。」

「私わたしだつて困こまつている、」とお夏も差俯さしうつむ向むいた。

「月夜で門かどへ寄合よしかつたという条、大きな野郎が五人三人、こうや

つて来たんだから、よくよくの事だと思いなさい、ね、さき、これが一番分わかり早い、分りましたか。」

のつび退引かせず詰寄るに従つて、お夏はますますかばいだて庇立、蔵人に

おつかぶ押被さるばかりにしつつ、

「もうきつとですよ、きつと鳴きはしませんよ、大丈夫だよ。私がよく言つて聞かせますから。」

「おやおや、この上軍鶏と話なんぞされて堪たまるものか、気味の悪い、何てツたつてどうせ助けてはおかないんだ。へん、言つて聞かせる、人間の言うことを肯きいて鶏が鳴かないようなら、勝手の悪い時は夜が明けねえや。」と嘲笑あざわらった者がある。

お夏は屹きつと見て、

「何、」

「何、何たあ、何たあ何だい、きようじや経師屋の旦那に向つて、何たあ

何だい、そんな口は軍鶏に利け。」

「はい、軍鶏の方が、お前さん方よりよっぽど余程いうことが分ります

よ。」

「みなさん皆様。」

一同の眼はまなこお夏に注いだ。

「面倒だ、やツつけましょう、可いや、てごめ手籠が悪いという方がありや後でまたあいて相手になる、留めなすつたつてがってん合点しねえ、さあ、ど退け。」

腕まくりをしてつか掴みかからんず権幕であるのに、お夏は更に意

に介しないか、眼あるものならば面をも向けられないほど、品ある顔に笑を湛えて、

「それでもほんとに分らないんだもの、あやまつたら可いじやありませんか。」

自ら疑わないことまたかくのごときはあるまい。まさに突飛ばして軍鶏を奪わんとした男も、余りのことに手が出なかつた。

それが猶予つたので、かえつて傍からいきり出した。あつちこつち耳ツこすりをして、

「エ、」

「さようさ。」

衆議一決。

四十二

兩人あり、その時、挟さしはさんでお夏の左右より、斉ひとしく袖を引いて、
 「さあ放した、退どかないか。」

「余り強情を張りなさりや仕方がない、姉さん、お前さんの身体からだ
 に手を懸けますよ。」と断つて立たち懸かる、いずれも門かど札ふだを出し
 た、妻子もあろうという連中であるから、事ここに及んでも無法
 に拳こぶしは握らぬので。

「何をするのよ。」

「いや、どうもしねえ、そん畜生を渡せてえんだい。」

「これ。」

「厭いやですよ。」

「厭？ 一人前の男に向つて、そんな我儘な挨拶があるものか。」
 「分らなけりや分らないで、可いから町内の交際つきあいというものを
 教えてやろう。」

「姉さん、虫の薬だ、我慢しな。」

「厭、」という時、黒髪は崩るごとく蔵人の背せなに揺れかかつて
 真ま白しろな腕かいなは逆に、半身捻ねじれたと思うと二人の者に引立ひつたてられて、
 風に柳の靡なびくよう、横よこざまに身悶みもたえした、お夏はさも口惜くやしげに
 唇を歪めたが、眦まなじりをきりりと上げて、

「私を、……私を、……私を、……」と怒いかりを帯びた声強く、月に

瞳を見据えたが、颯と耳朶に紅を染めた。胴を反して、雪なす足を折曲げて、

「あ痛々々々。」

たちまち血の気は頬に消えて、色は一際白ずむのである。

「虫殺しだ、ちったあ痛えや。」

「掴えツちまいなせえ、」とお夏を押えたのが早速の懸声、それもこれも瞬く間で。

「危え、わッ！」

といつて、今、お夏を引立てたのを見るや否や、軍鶏の頸を捕えようとした鉄は、両の掌で目を蓋して背後へ反った。

軍鶏はその肩の辺りまで素直に宙へ飛んだのである。

その脚の地に着くともろとも身に身をひるが翻えしてどんと突くと、「おツ、」と喚わめいて、お夏の腕かいなねじを捻つていたのが手を放して飛とびさ退がると、袖が断きれたか、とぐいと払つて、お夏はいま一人を振放して、つつと月影に姿を消したが、柳の下を潜くぐるが疾はやいか、溝を超えて、店へ駆け上ると奥へ入った。

後を追つて、奇異なる断きれぎれ々の声を叫びながら駆け出した蔵人を、ばらばらと追詰める連中の、ある者は右へ退のき、ある者は左へ避け、三人五人前後に分れて、賽さいの目のように散らばった。

要こそあれ滅多あたりこぶし当に拳を廻して、砂煙うずまの渦くばかり、くるくる舞して働うしろきながら、背後から割つて出て、柳屋の店頭みせさきに突立つたつた、蝸げ蜒げ眉まゆの、猿ざる眼まなこの、豹ひょうの額ひょうの、熟柿じゆくしの呼い吸きの、蛇へびの

舌の、汚い若衆わかしいしゆを誰とかする、紋床やっこしの奴愛吉だ。

「待ちやあがれ此奴等こいつら、私が出入先わっしをどうするんだ。」

奥から引返ひっかえして出たのはお夏、五七人の男を対手あいてに、いかに負けじとてどうする事ぞ、右手めでに長煙草ながぎせるを提げたり。かねて煙草たしは嗜たしまぬから、これは母親の枕辺まくらべにあつたのだろう、お夏はこの得物を取りに駆込んだのであつた。

「お嬢さん。」

「愛吉か。」

そのまま店から下りそうなるを、びつたりと背せなでおさえて、愛吉は土間一杯に身構えながら、件の賽くだんさいの目のごとき足並の人立に向つて、かすれた声、

「やい！ 何方様どなたさまもよくおいで遊ばされやがったね、へへへへへへ、何御用でございますか、仰せ聞けられまし、へへへへへへ。」

四十三

「……七錢三厘、二錢、五錢、十五錢、一錢、二十五錢、三十錢、可いいかい。」

「へい、可ようございます。」

愛吉は神妙に割膝かしこまで畏り、算盤そろばんを弾はじいている。間を隔てた帳場格子の内に、掛かけ硯すずりの上で帳面を讀むのはお夏で、釣つり洋燈ランプは持つて来て台の上、店には半はん蔀しとみを下してある。

「十銭、十八銭、四十銭、五十八銭。」

「うめ旨えもんですぜ。」

「こんな遅く読むのを置くのじゃあないか、ちつとも旨いことはありやしない。」

「いいえさ、あきない商もこうなりや、占めたものだというんでさ。」

お夏は何にも謂わないでほほえ微笑みながら、

「八銭、七銭、五銭、合せて十二銭、三十二銭、十六銭。」

愛吉あわただ慌せきこしく急込んで、

「おつと！ と。」

「またかい。」

「大概よ可うがすがね。」

「算用が大概じゃあ困るからね、また遣損なつたんでしよう。」

「ええと、今何でさ、合せてなんて、余計なことを言いなすつた時、おやゆびひつか拇で引懸けて、上が下りて一ツ飛んで入りましたつけ。はてな、」

お夏は帳場格子にひじ肱をついて、顔を出して、愛吉が手なる算盤を差さ覗いた。さしのぞ間近に照らす洋燈ランプの明に、と見れば喧嘩なぐりの名残である、前髪が汗ばんでいた。頬にかかるのは愛嬌あいきようげ毛で、

「幾ツ入違えたの、お直しな。」

愛吉は小指でちよいちよいと耳を搔かき、

「珠を幾つ遣損なつたか、それが分りますと可うがすがね。」

お夏は肱を掛硯の上へ支つき直して、明あかりうしろの後へ胸を引いた。

「もうこつちへお寄越しなさい。」

愛吉は一議もなく、算盤と一所に額を突出し、お辞儀をして、

「どうぞ願います。」

入違いにぽんと投出す、帳面を受取つて、愛吉は膝の上。

「読みますぜ。」

お夏は前髪の下へ、美しい指を一本、珠を狙つて傍目わきめも触ふらず、

「さあ、」

「しつかりおやんなさい。」

「ああ、」と真面目である。

「えゝと、こうだに寄つて、はじまりから遣りますよ、拾銭なり也。」

「ああ、」と置く。

「八錢八厘也、可うがすかい。」

「ああ、」と置く。

「三十五錢也。」

「ああ、」と置く。

「それから二十八錢也。」

「ああ、」

愛吉は目を擦こすった。

「お嬢さん、貴女あなたは手習はからつぺただっていうんですが、この字は細くって綺麗ですね。」

「ああ。」

「おっと、また二十四錢也。」

「ああ、」と置く。

「違つた、二、二、二、二十二銭、そう、そう。」

と独りで狼狽うろたえて独ひとりで落着く。

お夏は後生大事に、置いた処を爪つま紅まへにの尖さきでおさ圧えながら、

「ちらちらするね、きつと飲んでおいでだよ。」

「おつと、八銭也。」

早速珠を弾いて、

「ああ、」

「どうも一ツ一ツ、ああと返事をなさつちやあ、その間にぽつぽつ、私わっしなんざ及びツこなし、旨いものです。」

「旨いもんです。」とお夏は珠を凝視みつめたままで莞爾にっこりする。

愛吉はけろりとして、

「お次が二十八銭也。」

四十四

「お夏や。」

折から奥で衰えた声して呼んだのは、病の床に臥ふしているとい
 おつかさん
 う母様。この声を聞くと、愛吉は胸を折って、肩の中へ頸うなじを縮すくめ
 て、口をむぐむぐと遣る。お夏はこれを見ぬようにしてちよいと

見ながら、

おつかさん
 「母様。」

「おお、いいえ、来るに及びません、勘定をしておいでか。」

「はい、」と軽く言う。

「御苦労だの。」

「母様、今夜は愛吉が来てくれまして、種々あの交ぜかえしたり、下手な算盤を置いたり、間違つたことをいったりしますから、おもしろくツて可うございますよ。」

「酷いことを、」と口の裡、愛吉は苦い顔をして、お夏を怨めし
そうに見る目をばちくり。

「愛吉、難有うよ。」

「これは、」と額を押えたが、隔てていれば見えもせず、聞えもせず、目のあたりのお夏にはどんなに可笑かつたらう。

「母様、愛吉があんな風をいたします。」

愛吉はじたばたしたが、くるりと坐り直つて奥の方かたに手をついた。

「どういたしましたして、ええ、水をつて申しますと、平時いつものとおり裏長屋の婆さんが汲くみ込んで行つたと仰おっしゃ有るんで、へい、もう根っから役に立ちません。」と膝さすを擦つたり、天窓あたまを搔かいたり。

「へい、何でございまして、その、」

「何がどうおしなのさ、」とお嬢さん人の悪い。

愛吉はまた慌あわてて、

「その、何でございまして、へい。」

「佃島のは達者かい。」

「ええ阿母おつかあでございますか、ええ、ぴんぴんいたしております。ええ毎日のようにもお伺い申し上げませんければなりませんと、いつでもそう申しちやあね、濟まないツて言いますんでございませが、ああして一人で店を行やつておりますし、それにこの頃じゃあ、度々上ると、お夏様が氣を揉もんでお構い遊ばして、却つてお邪魔だからと、こんなに申しまして、へい。」

「そうかい、お前がちよいちよい来てくれるんだもの。佃島からは大變だ、今度逢つたら宜しくと申してくんなよ。」

「難有ありがとうございます、私わつしはどうもちつとも御用にや立ちませんで、ほんのもうお嬢様の癩癩かんしゃく、」

途端にお夏が帳場格子をコトコトと叩いて氣を着けた。振向く

と眉を顰めて、かぶりを振って見せたので、

「癩、」と行詰り、

「癩……癩なんぞお起しなすつちやあ不可ません、紋床の親方なんぞも申しますが、氣永に御養生なさいませんと、お焦れなさるのは一番毒ですつて、」といいかけて、額の汗を拭いながら、愛吉は這身になり、暗い蘆戸を覗入れるようにして、

「もし御新造様え。」

ややあつて、

「あいよ。」

「そして早くよくおんなすつて、またお襟でもあたらしして下さいまし、そうまずくはありませんや、剃刀だけは御用に立ちま

す。」としんみりする。

「涼しくなったら可かろうと思うよ、今夜あたりは余程よっほど心持が可いようだよ。」

しばらく言が途絶えたが、

「お夏や。」

「母様。」

「先刻さつきうとうとしていると、戸外おもてが大分だいぶん騒がしかったようだっけ。」

愛吉はぎよつとして、また頸うなじを縮すくめ、

「そうら。」

「何？ あれは。」

四十五

「何でございますか、向うの嘉吉さんの所の婆とこさんが気が狂ふれて
戸外へ飛び出したもんですから、皆みんなで取押えるツて騒いだんです
よ。」

とお夏は自若としていつて真顔で居る、愛吉は苦にが笑わらい、また
苦笑。

「そうかい、飛んだこツたね、そしてどうなりました。」

「火事だ火事だといって表町の方へ駆出して行きましたつけ、し
ばらくすると角の交番のお巡査まわりさんが連れて戻りましたよ。」

自分かかり合のことは丸抜にして言い紛らした。お夏は母親の前を繕さつきつたのであるが、しかし事実で。

先刻ちようど来合せた愛吉が、常に口にするよう、お夏の癩癩を引受けて、町内の人々と言ひ争ひ、すわや、搦つかみあい合あいの始りそ
うになつた時、あたかも可し、婆を捕えて、かの嬰あかんぼ児を抱いた
女房を従えて、嘉吉の宅へ届けるため、角の交番から出張したの
か、見ると騒動、コヤコヤと叱り留とどめて、所得税を納める者まで
入交つて、腕力沙汰は、おい、何事じやい。

双方聞合せて、仔細しさいが分ると、仕手方の先見明あきらなり、杖ステッキの差配おおや
さえ取上げそうもないことを、いかんぞ洋サアベル刀うなずが領くべき。

各々めいめい自分勝手な迷信から、他人の持物を侵そうとする、それ

も方角が悪いといつて、掃溜の置場所を変えよとでも謂うことか、
 鶏とりを殺そうとは沙汰の限り。

なお人一人、それがためにと申立てるが、鶏とりの宵よいなき啼で気が違
 うほどの者は、犬が吠えると気絶をしよう、理非を論ずる次第で
 ない。火事だ、火事だと駆け廻つて、いや火の玉のような奴、か
 えつてその方が物騒じや、家内の者注意怠るな、一同の者、きつ
 と叱り置くぞ、早々引取りませい、とお捌さばきあり。

あつちでもこつちでもぶつぶつがらながら、口小言やら格子の音。
 靴ひびきの響が遠ざかつて、この横町は静しずかになつたが、嘉吉が家ではな
 おばたばたするので、うるさいと謂つて、お夏が半はん 蔀しとみを愛吉
 に下おろさした、その内に蔵人は旧もとの閨ねや、煙管きせるもそつと、母親の枕許

へ、それで事^{こと}済^{ずみ}となつたのであるが、寐^ねつきなり殊^やに病^{まい}の疲れ、知らぬと思つていた母親に尋ねられて、お夏は落着いても、胸は騒いだのであるけれども、これも案ずるより産むが安かつた。

「愛吉、」

「ええ、」

無言で目を合せていて、やがてのこと。

「あの、母^{おつかさん}様。」

黙つて返事がないから、

「寐^{まなこ}なすつたよ。」

眼^{まなこ}を睜^{みは}つて呼^{いき}吸^きを凝^{こら}した、愛吉は吻^{ほっ}とばかり、

「可^いい塩^{あんばい}梅^{たしか}、確^{たしか}ですか。」とそツという。

「始終すやすやしていらつしやる、先刻さつきもよく寐ねていなすつた様だっけ。」

「それであの煙管などを持出して、ほんとうにあれを揮舞ふりまわすつもりでございましたか。」

「むむ、」とお夏は打領うちうなずく。

愛吉驚いた風で、

「途方もねえ。」

「私にだつて一人や二人は打ぶてようじゃあないか。」

「飛んでもねえ。」

お夏は澄いけなしたもので、

「不可いけないかしら？」

「不可いたって、可いたって、そんな身体からだで、あの中へ揉込まれて、串じょうだん戯だんじゃありませんぜ。髪の毛でもつかまったらどうします。」

「まあ、」

「ええ？」

「そうね。」とわけもなく合が点ってんする。

愛吉は乗出して、

「呑のん気きじゃあ困りますな。」

四十六

「だから私がいつでも言うんじやございませんか、荒いことは軍鶏と私とで引受ますツて。ですから私におつしやるまで、我慢をしていなさらなけりや不可ません、まったくですよ。御新造様がどんなに心配をなさるか知れません、可うがすかい。」

「それでも打棄つて置くと殺されるじやあないか、鶏を寄越せつて謂うんだもの。」

「そりやもう。いえ、済んだ事は仕方がありませんが、これからもあることです、これからの事ですよ。だつて先刻も私が来合せましたから宜かつたようなものの、どうして立至つた場合なら、貴女一人で叶いつこがありますか。どうせ叶わねえので見りや、怪我なんぞなさらない方が割方でございましょう、威張つたつ

て婦人だ、何をし得るもんですか。ねえ、」

「はい、さようでございますよ。」

「そら、御覧なさい。」と愛吉は説破し得たりという顔であつた。

「愛吉、」

「へい。」

「私が来たから可いようなものど、お言いだがね。」

「ええ、さようさ。」

「私はそうとは思いません、」と莞爾にこにこ々々する。

怪訝けげんな顔色かおつきで、

「はてね。」

「私はおまわり巡查さんが見えたからそれで助かつたと思ひますよ。」

「や、成程。」

「どうだい。」

「へへへへへへ、一言ひとこともござなく、……」

続けさまに天窓あたまを搔き、

「ですがね、お嬢さん。」

「ああ。」

「私わっしも深川のお宅へ泣込んで参りました時のように、いつも弱くばかしはございませんぜ。あの頃は何でもこう二三人とは謂いませんや、一人でも向うへ廻して、わツというと、」

愛吉はぎよツとする仕方をして、

「もう目がくらみました。何、どんな目に合おうかと危険けんのんだか

ら塞ぐふさぐんで、卑怯ひきように生命いのちが惜おしいと思うんじやありませんけれども、さぞ痛いたかろうと、あらづもりをするんでさ。」

「まあ、」

「もつとも、何ですか、一寸さきは分らないといった工合で、からだらしがありませんでしたが、段々馴なれて来てお前さん、この頃ころじゃあ、立身たちみになりましたよと、喧嘩けんかの虫むしが声を懸かけると、それから明るくなりますぜ。そら拳固こぶしだ、どツこい足蹴あしげだ、おつとその手を食たうものか、その内に一人つんのめるね、ざまあ見やがれと、一々合点がってんが出来ますだろう。どうです、強たかくなつた証あかし拠たすぜ。親方おやぢも言いいましたつけ、撲なぐりあいあいに目めを塞ふさがないようになりや、喧嘩流けんかぢうの折紙おりだつて、もうちつと年とし紀ぎを取とつて功こうを積たんで

来ると、極意皆伝おくゆるし奥許おくゆるしと相成ります。へ、」

「おやおやそうすると。」

「喧嘩をしませんとき。」

「何、」

「極意皆伝奥許というのは喧嘩をしない事ですとき、何のこつた詰らない。」

と愛吉は何か詰らなそう。

「ほんとうに詰らない、」

「いえ、ところが私わっしにやあ不可いけません、お嬢さんなんざ何でも分つていなさるんだから、はじめから幾らも皆伝になられます、荒つぱい気をお出しなすつちやあ不可いけませんぜ。」

「ああ、だからお前も喧嘩の話はおよし、お前の話というときつと喧嘩の事だよ。」

と淡泊あつさりしたことを謂いながら、物足りなそうな、済まぬらしい、愛吉の様子を眺めて、もの優しく、

「おもしろい話をお聞かせな、私も淋さみしいからゆつくりおし。そして、煙草たばこがなくば上げようか。」

四十七

愛吉は店の箱火鉢を引張り寄せ、叩き曲げた真しんちゆう鍬くわの煙管きせるを構え、膝ひざ頭がしらで、油紙の破れた煙草入の中を搔廻しながら少し

傾き、

「ト、おもしろい談はなし？ 鯰なますが許ごとこのかのお米が身の上……ありたしかや確
もう御存じでございましたね。」

「ああ、二三度聞いたよ、可哀相だわ、おもしろくはないよ。」
「さてと、困ったな、喧嘩が禁制となつて酔払いがお氣に入らず
とあつては、前座種切れだ。」

と吸いつけ、

「お待ちなさい、お米が身の上は可哀相きまと極きまつて、長崎こわめから強
飯しが長い話と極きまつた処で、これがおもしろいと形かたのついた話と
いつてはありますまい。わっし私が一度甲州街道の府中に行つていたこ
とがあります。

よくはやりましたが、新しん店みせで、親方おやぢというのが少わかいので、女か房みさんもまだ出来たてだもんですから、職人は欲しい、世話はしたいが一所に居るのはちと工合が悪い、内には妹と厄介な叔母おばとが居て、ちようど別に一軒借りようという処で、家は見つかつていゝる、所帯道具なんぞ、一式調い次第あとから繰込むとするから、私に先へ行つて夜だけ泊つていてくれるところという話です。

宜ようございますとも。早速その晩から煎餅蒲団せんべいぶとん一枚ずつ抱えて寝に行ゆきました。木戸があつて玄関まであつて室数まかずが七ツばかり、十畳敷の座敷には袋戸棚、床の間づき、時代にてらたら艶つやが着いて戸棚の戸なんぞは、金箔きんぱくを置いて白鷺が描いてあろうという大したもんです。

私は日いわくつき附の家へ瀬踏せぶみに使われたんだとは気が着きませんや。床屋風情にやあ過ぎたものを借りやあがった、襖ふすまの引手ひとつひ一個引剥つべがしても、いつかど飲代のみしろが出来ると思つて、薄ら寒い時分です、深川のお邸やしきがあんなになりました、同一年おなじの秋なんです。その十畳敷まんなかの真中まんなかで、昆布巻こぶまきを極めて手足をのびのびと遣りやましたつけ。」

愛吉は吸殻はたを払いて、

「可ようござすかい、さあ寝られませんか。総鎮守の風の音が聞えますね、玉川の流ながれは響きますね、遠くじやあ、ばったんばったん機はたお織りの夜延よなべでしょう、淋さみしいッたらありません。」

悪くするところや狐でも鳴きそうだ、弱りましたね、さよう、

一時頃でございましたらうか。」

聞惚ききごとれていたお夏は急にあどけないことをいった。

「出たかい。」

余り唐だしぬけ突に聞かれたから、愛吉まごついて、

「へい、何でございます。」

「いずれ何か。」

「最初は、庭に手水鉢ちようずばちがあります、その雨戸がカタリといいましたつけ、縁側を誰か歩行あるいて来ます、変だと思ってる内に、広間の前の処で登あしおと音が留やんだんです。へい、」といって一ツ自分で頷いた。

「それだけ。」

「どういたしまして、これからなんです。しばらくすると、すつと障子を開けましたが、私が枕を持上げる時には、もう畳を三畳ばかりすらすらと歩行あるいて来ました。

見ると婦人おんな。

はてな、盗とられる物はなし、戸締りはして置かないから、店から用があつて来たのかしらと、ひよいと見ると、どう仕つかまつり……床屋の妹こがらというのはちよいと娘柄は佳ようございましたけれど、左の頬ほつぺた辺あざに痣あざがあつて第一円顔なんです。」

四十八

「よく演劇しはいでしたり、画えに描いたりするのは腰から下が霧のようになつてましよう。

わっし

私わががその時見ましたのは、どうして、大した結構なものですぜ。目鼻立のはつきりとした、面長で、整然ちやんとした高島田、品は知りませんが、よろけたたてしま豎縞の薄いお納戸の着物で、しよんぼり枕許へ立つたんです。

時刻は時刻だし、場所は場所ですし、第一、その玉がまた、府中あたりに見ようたつて見られるのじゃありません。何なんしろお嬢様、三階建だちの青楼おちやの女郎が襟のかかった双子ふたごの半纏はんでんか何かで店を張ろうという処ですもの。

こびきちよう

歌舞伎座のすつぽんからせりあが糶上りせりあがそんな美しいんだから、驚き

ましたの何のつて、ワツともきやつともまさかに声を上げはしません、一番生命いのちがけで、むつくり起上ると、フイと背後うしろむき向になつて、風を切るようにすつと引返しました。その時は背筋のあたり、真まっしろ白な襟を艶つやつや々した鬚まげね、毛筋もならべたほどに見えましたつけ、もう消えたんです。あくる朝はほんやりでどうも考えて見ると夢のよう、早い処でまず、その消えたあとのことを思出すと、何しろ真まっくら暗なんでございましょう。夢でなくツて顔色がどうの、着ものの色がどうの、鬚かたの形がこうのと、分るわけがなからうじやありませんか。

夢とすると話が出来ない、いかに田舎稼かせぎに出ていたつて、野郎の癖しんぞに新造しんぞの夢でもありますまい。これが山賊に出逢つて一貫投

げ出したとしてもいふ事なら、意氣地がねえたつて茶話にやなりま
 さ。

黙っていました。

その晩、また昨夜ゆうべのように、燧火マッチだけは枕まくらもと頭あたまへ置いて火の
 用心あかりに灯は消して寝たんですが。

おなじじこく
 同一おなじじこく一刻になりますと、雨戸がカタリ、ほんの、カタリと聞え
 ますだけなんで、縁側にあしおと登音あしおとがしましよう。枕を上げて見たば
 かりで、何故なぜだか起返る事が出来ません。

その女もしばらく立っていましたつけ、別に何という事は無し
 に、縁側の障子の際で、肩あたりの辺あたりが消えますとね、棧が見えて高島
 田もなくなりました。」

お夏は半ば聞棄てて、気を入れるともなく返事ばかりして、帳面をあつちこつちばらばらと返していたが、この時一点も疑う色のない顔を上げた。

「奇代だわねえ。」

「ええ、まだまだそれが三晩四晩と続きましたね、段々気味が悪くなつて来るせいですか、さあ、おいでなすつたと思うと天窓あたまから慄然ぞっとして、圧おしを置かれるような塩梅あんばいで動くこともありません。

五日経たつてからお約束の、叔母と、妹というのが引移りました。けれども、それわっしに瀬踏をさした位なんですから、そうやって日が経つても、何にもいわないについて大丈夫とは思つたでしょう

が、まだ安心がなりますまい、そこで段取は拔ぬき、所帯道具は運ゆばないでまず泊りに来たもんです。

次の室まの六畳に二人抱うッこをして寝ましたつけよ。お前さん昨夜うべは大層うなされてねと、夜が明けてから吐ぬかしまさ。さあいよいよだ、とぎよつとしたけれど、何時頃にと、惚とぼけて尋ねますと、ちようど刻限が合ってるんで。

ままよ、こうなりや百年目だ。新造に取とツつつ着おほえかれる覚おぼえはないから、別に殺そうというのじゃあなかろう、生命いのちに別条がないと極きまりや、大威張りの江戸兎えどつこ、

「吻ほほ々ほほ々ほほ、」

「ほんとうに度胸を据えました、いえ、大したことじゃありません

ん。何か化けて出る因縁があるに相違ないと思いましたがね、
 思い切つて聞いて試みようと、さあ、事が極きまると日の暮れるのが待
 遠いよう。」

四十九

「婦人おんな二人は、また日が暮れると泊りに来ましたが、いい工合あに青
 緞おどしを少々握りましたもんですから、宵の内に二合半こなからあお呷りつけて、
 寢床に潜り込んで待つてると、案の定、刻限も違たがえず、雨戸カタ
 り。」

ちらりと姿が見えたが勝負で、私わっしあ目を瞑ねむつて、江戸兎だ、お

前さん何の用だ、と言いました。

すると莞爾にっこり笑ったから凄うすごございませ。少し俯向うつむいてこう胸の処に袖を重ねていた、それをね、両方へ開いたでしょう。

突然いきなり、大蛇うわばみの天頭あたまでも顛あらかれるかと思うと、そうじゃありません。

ません。これを預けたさに、と小さな声で謂いいましたね。青い襦じゆ袢ばんの中から、細い手を差延べたから、何か知らんが大変だ、幽ゆ霊ぼんの押お着つけものなんざ恐おしい、突退つぎけようと向うへ突出したこの手

ツ首の細い処へ、」

愛吉は指の環わで左の手首を握りながら、

「一本きらきらする銀かんぎしの簪かんざし、脚を割わつて突つきすように挟くんだんです。確たしかに、可ようござんすか。確たしかに、という口の下、ぐいぐいとそ

の簪の脚が緊しまりましてね、ここが不思議ですよ、その痛いことと謂いつたら。思わずキヤツというと、愛吉さん愛吉さんと呼びますわ、次の室まで二人の声がするから、気が着きますと、私わは床の上へ坐り直うつて、現うつにもお嬢さん、こうやって左の手ツ首おを圧おえていたんです。

恐おそしいことには、夜があけても何なだか脈み 処ところが冷ひやたいようで、ずきずき痛みましたから堪たりません。

打明うちあけては言いいませんでしたけれども、二晩ふたべ続けて私わが魘うされたのを聞きいたんで、婦人おんな二人はもう厭いやだとかぶりを振ふります。

有う耶や無む耶やの内うちは、夢ゆめだろうぐらいで私わも我慢まんをしましたけれど、も、そうどうも手首てしゆへ極印ごくいんを打うたれちやあ辛抱しんぱうがなりません。と

ても次の晩からはその家へは寝られませんが、形かたなしになりましたが、私あはじめてです、いまだに不思議に思いますがね。」

「それツきり逢わなかったの。」

「ええ、もう木賃の方へ逃げました。」

「惜しいことをしたねえ、何かお前に頼みごとでもあったんじやあないか、それでなくつてもまた来た時を待っていて、分わけを聞けば可よかったのにね。」

と身に染みて、お夏は残惜しそうな風情であった。

「今で見ますと、私も惜おしいことをしたと思います、ですがお嬢さん、その場に臨んで御覧なさい、その気味の悪いことといつちやあ、口で謂うようなものではないんですから。」

お夏はこれを聞取らなかつたほど、何か考えていたが、

「幾歳いくつ、」

「十八九で、」

「一昨年おとしのことだつて、」

「一昨年でございますよ。」

「一昨年十八九、私と同年おないどしぐらいだねえ？」

「飛んだことを、譬たとえになすつちやあ不可いけません。」と驚いて言う。

お夏は自若として、

「そして簪かんざしを預けたいといつたつて、十八九で綺麗な女で、可愛

らしいお化ばけだこと。ほんとに可愛いじゃあないかねえ、」ともの

おもい、もの思う様子で謂いながら、つむりへ手を遣ると、さし

ていた銀脚の簪を抜いて取った。

「愛吉、ちよいとお見せな、手を。」

「へい、」

「こんな風に預けたの。」と、そのまま手首へはさんだが、よくは入らないから耳の処へ力を入れた、銀は柔かく二ツに分れて、しろがね愛吉の手は帳場格子の上に結いつけられたようになったが、双方無言で、やがて愛吉はぶるぶると震えた。

五十

「取ってお置き、それをお前に上げましょう。」とお夏は事もな

げに打微笑み、
うちほほえ

「それであるのお化の念が届くんだわ。」とあつけに取られた愛吉の顔をさも嬉しそうに眺めたが、不意に色をかえて、お夏はちよつと簪を抜いた髪に、手を触れて見て屹きつとした。この時の容貌は、過いつぞや般深川の橋の上で、女中に取巻かれて火を避けたのを愛吉が見たそれのごとく、ほとんど侵すべからざる、威厳のあるものであつた。しかもあきらかに一片の懸念の倂おもかげは、美しい眉宇びうの間にあらわれたのである。お夏は神に誓つて、戯たわむれにもかかる挙動ふるまいをすべき身ではないのであつた。

しかるに愛吉が状さまもまた極めて案外。

その手も引かず渠かれは色を正して、やや開き直つたといふ体ていで、

「お嬢様、それじゃあこれをお記念かたみに頂きましょう。」

「え。」

「お嬢さん、私わつしは何とも申し上げようはございません。」と片手をそれへ、頭つむりをさげたが、声の調子も変っている。

「私あお嬢さん、あなたに取っちやあ敵かたきでございます。へい、とんでもない、謂いわばその獅子身中の虫と謂うんで、こんな分らずやで何にも存じませんもんですから、愛吉々々とおっしやつて下さるのを、可い事にして、癩かんしゃく癩やくは引請けましたなんぞと、汝うぬが勝手な熱を吹いちやあ、ちよいちよいお出入をするもんですから、こんな役やくざ雑ざものと口をお利きなさりますばツかりで、お嬢様あなたに人が後指を指すんです。知らない内はから呑気で、一向

澄したものでおりましたが、人から気をつけられて身体からだを持つて行き処のないほど、驚いたんでございますよ。

まあどの位、こちら様に害をなすか、こん畜生、数すうが知れねえんで、へい。実に相済みません、何てつておわびのいたしようもないのでございます。

今晚も実は一ひとこと言申上げて、お暇いとまご乞こをしまししようと、その事ことで上りましたが、いつに変わらず愛吉々々とおっしゃるので、ついでに言い出しかねておりました。

唐突だしぬけにこんな事ことを敷やぶから棒、気が違ちがったかとお思いなさいませうが、お嬢さん。

あなたも何にも御存じなし、私もちつとも知らないでおります

内に、あなたの御縁談が一つ打破ぶちこわれたんでございまして。

これが並ひととおり一通のことじゃありませんや。対あいて手がまたその

辺に相手欲しやでうろついてる出来星の吝けちな野郎じゃありません

ん、汝うぬが身体からださえ打棄うつちやってる私ですもの、大臣だつて、大将だ

つて、大金持だつて何だつて、糸瓜へちまとも思わねえのに、こればか

りは大の鼻ひいき根で、心底から惚ほれていきます山の井の若先生。」

「愛吉！」

「お待ちなさい、それだ、分つてます。京橋から築地、この日本

橋、神田、下谷したや、一度見た親はこういう人をお思わねえものはあ

りますまい。今度あなたの代りに極きまりました縁さきの先方さきの、山河内

の奥方たむしてえ、あの癪たむしの大年増むすめなんざ、断食をしないばかりに、女むすめ

を押つけようといつて騒いだと申すんで。

その若先生が、お嬢さん、あなたを望みで、影日向心ひなたを入れていたというのに、何と私が着絡つきまとってるばかりに、控えたというじゃありませんか。」

「愛吉！」

「済みません、分つてます、分つてます。しかもこういう事をはじめて聞きましたのが、先達てお嬢さんが口惜くやしがつておいでなすつた、根岸の鴨川一件だ。鼻元思案のお前さきばしりに私が暴れあばれ込んで、ひツくりかえつて可い心持で飲みました晩ですぜ。それと分つてからはお顔を見るにも御不便ごふびんで、上りかねましたから、こんなに御不沙汰にもなりましたが、もう一度問直そうと、山の井先

生がその時は、自分で鴨川の許へ行つたツていうんです。それが頼まれもせずいいつけもなさらない、お嬢さんの名を出して、私が暴れて歸つたあとだった、というじやありませんか。

口惜くやしいのは、お嬢さんに団扇うちわで煽あおがせた時がと言うと、あの鴨

川きもいりめが肝入で、山河内の娘に見合をさせるのに、先生を呼んだ

日だと謂いますわ。敵かたきだもの、おまけに、私が歸つたあとで、あ

なたの相談がどうなります。それに、まだ、そんな事じやあない、といひますのはあの若先生は、お嬢さん、あなたが誰にもおつしやらないで、心で思つていらつしやる、……」

「愛吉！」

「いいえ、分つてます。誰も知りませんが、これを、いつて聞か

したのは、竹永丹平という、新聞社の探訪員。」

明治三十三（一九〇〇）年九月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成9」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年6月24日第1刷

底本の親本：「鏡花全集 第六卷」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日第1刷発行

初出：「大阪毎日新聞」

1900（明治33）年8月9日～9月27日

入力：門田裕志

校正：仙酔_{あびす}

2012年3月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三枚続

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>